
起動したての 안드로이드 ver.1

葉藻阪 松園

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

起動したてのアンドロイドver. 1

【Nコード】

N1556V

【作者名】

葉藻阪 松園

【あらすじ】

【内容】

現代日本。実は未来から来た超能力を持つアンドロイド達に裏から支配されていた????

そんな中、同居することになった3人の日常を描いた話。3人の視点が切り替わります。

【登場人物1】

轟連治…唯我独尊な姉に振り回される高校生の少年。超能力が効かないらしい。

【登場人物2】

黒田久美…自分は本当に人間なのか？と疑問に感じていたトラウマ持ちの中学生の少女。

怪しい男にアンドロイドであることを告げられ、超能力を与えられる。

【登場人物3】

轟春香…連治を溺愛するOLの姉。

【あらすじ】

アンドロイドの未来と自分の幸せをつかむため、久美が超能力を駆使して轟姉弟と仲よくなれるように頑張るうちにトラウマを乗り越え人間に近づいていく…。そんな話です。

【注意】

シリアスな場面もありますが、感動ラブコメ目指しています。

冒険、バトル、ファンタジー要素は少なめです。

タイトルにver. 1をつけました。

また、Arcadiaでも投稿することにしました。

連治：妹を思い出し、主人公のごとく黄昏れる（前書き）

初投稿です。

よろしく。

連治：妹を思い出し、主人公のごとく黄昏れる

「姉ちゃん、タオル持ってきたよ」

それはやたらと蟬のうるさい小学生最後の夏休みだった。

双子の妹の凜音が風邪をひいたので、連治は体をふくためのタオルを持って彼女の部屋に入ると、布団にくるまって少し息の荒い凜音を姉の春香が心配そうに見つめていた。

ずいぶん、ましにはなってるのかな。

一時間前に病院でもらった薬を飲ませたためか、連治の目には凜音は少しづつ回復しているように見える。

連治の渡したタオルで姉は凜音の上半身を拭き、新しい寝間着を着せた後に凜音に話しかけた。

「凜ちゃん、大丈夫？」

「うん」

「じゃあ仕事に戻るから、二人とも留守番頼んだね。

連ちゃんは、凜ちゃんの面倒見ててね。

凜ちゃんがまた辛そうになったら、私に電話かけるか、病院に電話かけるかしてね。

2時間すれば帰ってくるから」

「うん、わかった」

呼び出して、仕事大丈夫だったのかな？

連治たちの両親はすでに1年前に亡くなっていたため、仕事中の姉を電話で呼び出し凜音を病院まで運んでもらったのだが、重要な会議の直前だったらしく姉は意を決したように走っていった。

「ごめんね。今年は、行けそうにないね」

何のことかな…？ああそういえば…。

ぽつりと凜音が呟いたのを聞いて、今日は年に一度の夏祭りだったことを思い出す。

毎年、姉に内緒でお小遣いをためて二人でこっそりお祭りに行っているのだが、今年も二人で行こうと約束したので、それを謝っているのだろう。

「いいよ、来年もあるし」

ちょっと残念だけど…。

少し残念に感じていたのが凜音に伝わったのか、もう一度、ごめんねと呟く。

しばらく凜音の咳とセミの鳴き声しかなかったが、突然凜音が俺が一人で祭にいけないと提案してきた。

「凜音と一緒にじゃなきゃいけない」

と返事したのだが、一度言い出したなら聞かないのは姉に似ていて、連治が夏祭りに行くまで言い続けることは予測できた。

「約束のイカ焼きと綿あめ買ってきて」

約束…？

そんな約束したかなと考えていると、もしかして忘れてるのかと尋ねてきた。

真っ赤な顔でじっと見てくる凜音から慌てて目をそらした場所に魚拓が飾ってあるのが目に入る。

去年のお正月に書き初めの宿題をしている最中に暇になってついでに作製したやつだ。

前日に連治と凜音と一緒に釣った魚の魚拓で、凜音がはじめて釣ったのを喜んでいたのを思い出し、知り合いのおじさんに教わった魚拓を試してみたものだ。

それを見た瞬間、そういえば去年は釣竿を買ってもらったために一年間お小遣いなしだったことを思い出す。

「もちろん。覚えてるよ。」

去年は、凜音におごってもらったから、今年は僕が凜音におごる番だよ」

その言葉を聞いた瞬間満足げにうなづく凜音を見て、ため息が出そうなのを我慢した。

「じゃあ、すぐ帰ってくるから。無理しちゃだめだよ」

「うん」

急いで机の中をひっかきまわし、見つけた青色の貯金箱から全財産を財布の中に詰め直した後、全力でジンジン五月蠅いセミの声のする外に駆け出していく。

連治はハッと気づくと時計は夜の11時を示していた。

いつの間にか眠っていたらしい。

夏休みに入ってから毎日バイトを入れていて、疲れがたまっただろうか。

今年高校生になったので始めた中華料理屋のバイトが先ほどまであり、一日中暑い厨房と冷えた客席を行ったり来たりしていたのだ。

姉が働いているのでそこまでバイトをする必要はないのだが、欲しい釣道具があるので店長に頼んで毎日仕事を入れてもらっていた。

暇になると昔のことを思い出してしまうので無意識に理由を作って忙しくしていただけかもしれない。

そんな考えがふと頭を過った。

今日みたいな蒸し暑くセミがうるさい夏の夜になると、4年前の凜音の最後の日の夢をよく見てしまう。

あの後、連治が帰ってきたときには、凜音が苦しそうに喘いでいた。

急いで救急車を呼んだのだが結局間に合わなかった。

姉とはあの日の話をすることはほとんどなく、1年後になぜ姉は責めないのかと理不尽にあたってしまったが、今ではこの夢を見てもイライラすることは少なくなった。

なぜあの時凜音が嫌がってもずっと傍にいなかったのかと何度後悔したか数えきれない。

ただ、少しずつ吹っ切れてきたのかなと最近では思えるようになってる。

散々迷惑掛けた姉にも感謝しなければならない。

「ただいまー、連ちゃん、い・と・し・の姉さんが帰ってきたわよー」

姉の声が玄関から響いてきて、思考がそこで一瞬停止した。

とりあえず感謝の前に、今年で28になるはずの、い・い・と・し・の馬鹿姉にご近所迷惑と世間体という言葉を教えなければいけないらしい。

連治：妹を思い出し、主人公のごとく黄昏れる（後書き）

2011年	07月	24日	ブログ投稿
2011年	07月	26日	ブログ改変―迷惑掛けます
2011年	07月	29日	ブログ改変―迷惑掛けます×2
2011年	08月	04日	ブログ改変―迷惑掛けます×3
2011年	08月	06日	ブログ改変―迷惑掛けます×4

久美..あからさまに胡散臭い男と話す（前書き）

【ご注意】 この第2話はシリアスです。過度な描写はありませんが、少女が過去に母親に虐待されていたことに言及するシーンがあります。そういったものを全く受け付けない方は、バックをお願いいたします。

久美…あからさまに胡散臭い男と話す

中学最後の夏休みのある日。

ゼミ達がガヤガヤ騒ぐ中。

黒田久美は近くにあるスーパーの買い物袋を膝に乗せて公園を車いすで横切っていた。

久美が砂場の近くを通り過ぎようとした時、彼女の前にサッカーボールが転がってくる。

それを精密機械のように器用によけると、彼女の左足が義足であることに気付いた4人の小学生がロボットだと騒ぎ始めた。

ロボットと言う単語を聞いた瞬間、なぜか久美の頭に過去に母親に虐待されたシーンが突然よみがえってくる。

またこの記憶。

なぜいつも思い出されるのだろうか？

特に悲しいとも、辛いとも感じないのに。

ただなぜその記憶がよみがえるのか不思議に感じるだけなのに。

未だに騒ぐ小学生の横を通り過ぎ、久美は公園から出ることにする。公園からでて道路を横切り、その向かいにある孤児院の扉に手をかけた。

ドアノブを回し中に入ろうかというところで、後ろから声をかけられる。

「御嬢さんこんばんは」

御嬢さん？私のことかな？誰だろう？

久美が振りかえると、夏にも拘わらず黒ずくめのスーツを着た怪しい風貌の男が怪しい笑みを浮かべて立っていた。

「あなたは、自分がアンドロイドではないかと疑問に思ったことはありませんか？」

この人はなぜそのことを知ってるのかな？

それは、御嬢さん―黒田久美―が確かにいつも疑問に思っていたことだった。

久美の声はロボットのように無機質であり、動作も不自然で、何より味も匂いも感じるができない。

しかも、感情に乏しく、喜びも悲しみもまったく感じた記憶がない。

長髪の黒髪で真っ白な肌の久美はよくお人形さんのようだと言われるが、それは容姿をほめたというより無表情で作り物のような顔に皮肉をいつていることが多い。

顔の部品一つ一つは整っているにもかかわらず表情に変化のないためか、久美の顔はかわいいというよりも奇妙と言う方がしっくりくるらしい。

そのような理由から、自分はロボットなのかもしれないと考えることが度々あった。

「最初はみんなあなたを異常に感じるでしょうが、いつの間にかその違和感を不自然に忘れてしまっている。違いますか？」

なぜこの人はそこまで知ってるのだろうか？

男の言うとおりだった。

初対面の人たちは久美に対して疑問に感じるようであるが、しばらくするとその違和感がさも当然のことかのように接するようになる。

「しかし、そんな精巧なアンドロイドが存在するはずはない。」

この人は私のことをどこまで知ってるの??

それも、その通りだった。

一度、孤児院の院長に自分はロボットではないかと相談したら、現代にそんな技術はないと苦笑いされてしまった。

「それらの疑問にお答えいたしましょう。
もし、続きを知りたいのであれば、この通信機をお受け取りください。
い。」

ボスが直接あなたにお話がしたいそうです」

怪しい…。怪しいのは確かだけれど…。

名もない劇団の大根役者のような大げさでゆったりとした動きで男がポケットから取り出した通信機を久美に向かって差し出してきた。余りに胡散臭いため最初は躊躇したのだが、なぜか受け取ってしまった。

「では、しばらくしたら、ボスから連絡が行くと思いますので」

受け取ってしまった…。大丈夫かな…。

男の不気味な笑みに受け取ったことを少し後悔しかけたが、自分の演技に満足したかのように大股で去っていく男の姿が見えなくなるまで見送ることする。

男が角を曲がって見えなくなった時に夕食の準備があるのを思い出し、久美は慌てて孤児院に戻ることにした。

久美は夕食の後に通信機が振動しているのに気付き、急いでトイレに駆け込み通話を開始した。

「始めましての方がいいかな。

製造番号…DOI987126よ。

私は、シードと呼ばれているアンドロイドだ」

アンドロイド？

確かに人間とは思えない声。抑揚がなく奇妙な声。

その言葉からはじまったシードの声は40代の男の声に聞こえるが無機質で全く人間味を感じることができなかった。

あまりに不気味な声に信用できるかどうか迷ったが、久美はとりあえず話を聞くことにした。

シードの話によれば、どうもこの世界は、未来からタイムトラベルしてきたアンドロイドが人間達に気づかれずに支配しているらしい。しかも人間に気づかれるたびに何度もタイムトラベルを繰り返し、人間達が同じような歴史歩むように密かにコントロールしていることを伝えられた。

「人間にばれたとき人間とタイムトラベルを使った争いが起きなかったんですか？」

疑問に思ったので質問する。すぐに答えが帰ったきた。

「タイムトラベルは生命を運ぶことができないので人間と争いが起こっても負けることはない」

なるほど。それでは人間はアンドロイドに絶対勝てない。

「では、私もタイムトラベルできるのですか？」

それができれば本当に自分はアンドロイドなのだろう。

その考えは、すぐ否定される。

タイムトラベルの装置を積んだアンドロイドは現在シードだけらしい。

タイムトラベル時は、すべてのアンドロイドからシードに記憶を集める。実質的には、アンドロイドはすべて生き残る。というのがシードの主張だった。

壊れてもバックアップ可能。だから久美も不死との結論らしい。

しかし、完全に人間がいなくなるとアンドロイドが発展しないために影から支配してアンドロイドを研究させているようで、シードによるとアンドロイドは既製品の改良はできるが革新的発明はできないとのことだった。

今までの話に矛盾はないように感じる。

しかし、もし本当に自分がアンドロイドだとすると当然一つの疑問が出てくる。

「私は、何の目的のために今回作られたのでしょうか？」

「あまり慌てるな。順を追って話していこう」

そう告げて、しばらくの静寂が空間を支配したのち、通話機越しに紅茶を啜る音とカチャリというカップを置く音が聞こえてきた。

「そうだな。まず現在の一般的なアンドロイドについて説明しようか。」

アンドロイドは、電腦中枢と呼ばれる領域で情報を処理している。その処理を電算処理という」

電腦中枢？電算処理？聞き慣れない言葉が並ぶ。

人間で言うところの脳と思考という意味なのかなと考える。

「そして、アンドロイドは、ナノマシン細胞と呼ばれる人間の感覚器官を模したもので表面がおおわれていて、この細胞が外界からの情報を取得している。」

アンドロイドの機体の中では、電腦中枢とナノマシン細胞を結び付けられていて、使い込むうちに味覚・嗅覚・触覚・視覚などが模倣できるようになる。

今のところお前は、視覚と聴覚は問題ないようだな」

周りの人間と感覚が違ったのはそのためだったのかもしれない。味と匂いを感じないのは、私の機体が模倣がまだ完ぺきでないから？そうなら今まで不可解だったことの説明ができるかも…。

「はい、触覚も問題ありません。しかし味覚と嗅覚はまだ…」

「心配無用だ。少しずつ改善するだろう」

次に、アンドロイドではないと院長に言われたときに提示された一番大きな理由を聞いてみる。

「私はなぜ成長するのでしょうか？」

シードは笑って答えてくれた。

「骨格の自動縮尺変更が装備されているため、成長や老化現象も再現できるようになっている」

人間の中に入り込むアンドロイドにとっては、当たり前前の機能らしい。

シードは説明を続ける。

「しかし人間に似てくるというだけで完璧ではなく、当然不自然に感じる人間も出てくる。

それを解消するのが、常にアンドロイドの機体が発信している認識障害電波だ。

その電波には、人間の脳に直接働きかけ、不自然なことを受け入れてしまう催眠効果のあり、それによって、アンドロイドであること

を人間に気づかれずに今までは近づけていたのだが」

認識障害電波？

それがらるから、私への違和感を皆は不自然に忘れてしまっているのかもしれない。

それがあつたから不自然な私を受け入れてくれたのかもしれない。

久美はそう理解した。それなら確かに納得できると。

ただ、今まではという言葉が気になり久美は質問した。

「そう。今までは。」

今回が15回目の2010年だと話したな。

前回の14回目の失敗は、認識障害電波の効かない改造人間が大量に生み出されたことが原因だ。

認識障害電波は、人間の脳にある視交叉に働きかけるのだが、遺伝的にその形状が通常と異なる人間が存在し、どうも彼らには認識障害電波が効かなかったらしい。

それだけならともかく、反アンドロイド組織を立ちあげ、視交叉を改造した認識障害電波の効かない軍隊を秘密裏に作り上げていたのだ」

シードは一息置いた後、話を続けた。

「今回は、反アンドロイド組織が発足しないように慎重に事を進めているのだが、実は4年前にその状況に進展があつてね。

人間の協力者の研究により視交叉の形状に変化があつても認識障害が効く電波が開発されたのだよ」

新しい認識障害電波も気になったが、協力してくれる人間がいることに少し疑問に思う。

思ったが、報酬さえ貰えば何でもする人間がいてもおかしくないかなと考えを改める。

ただし、人間を信用できるのかと質問した。

「危険ではないのですか？」

「もちろん、家族にも秘密は漏らせない状況にはしているがね。

さっきこの通信機を渡したゴーハも人間の協力者の一人だ」

ゴーハ？ また、変わった名前。彼は本当に人間だったのかな？

先ほど会った怪しい男も人間だったと知らされる。

その割には動きがおかしかったかもと疑問に思っていると、シードは、そのまま話を続けた。

「少々、話がそれたな。

今回の話の本題なのだが、最新版の認識障害電波、我々は認識障害電波改と呼んでいるが、その実験のために認識障害電波改を組み込んだお前を作製したのだ。

実験と言っても、特定の人間と話をして、認識障害電波改がうまく働くかどうか観察するだけだな。

やっではくれんかね？」

今までただ動いていただけの久美にとって、受けても断ってもどちらでもよかった。

ただ、特に迷惑になる頼みでもない気がしたので、了承することにした。

そして何よりもっと気になることを早く質問したかった。

「先ほど、認識阻害電波改が4年前に開発せれたと…」

「その通りだ。おそらく疑問に思っているのは、お前の制作された年とそれが一致しないということか？」

そう、それが気になった。

久美には4年以上前の記憶が存在している。

あまり人間的には喜ばしい記憶でないのだけれど。確かに存在はする。

それでは、4年前に開発された認識阻害電波改のために久美が作製されたということとつじつまが合わなくなってしまう。

久美が黙っていると、シードはその疑問に答えを返してくれた。

「お前は、私が3年前に作製したのだよ」

「3年前？」

「そう、お前が孤児院に入る直前だ。
それ以前の情報は、私が植えつけたものだ」

「親に関する情報もでしょうか？」

「当然そうなるな」

久美の孤児院以前の記憶では、父親がおらず母親と二人でアパートに住んでいたことになっていた。

その時の記憶には、学校にも行かせてもらえず、母親に殴りつけられる光景しか残っていなかった。

何度も何度も理不尽に殴られ、何度も何度も理由も分からず暴言を吐かれる光景だった。

今でも、その映像が電脳中枢で時々再生される。

なぜ何も悲しくないのか疑問だったが、それが解けた気がした。

植えつけられた記憶だったから…。

ただそれだけの理由。

アンドロイドだったから…。

たったそれだけの理由。

今までの問題が一気に解決した気がした。

普段なら怪しすぎて絶対信用しない話だろう。

しかし久美にはその話が真実だと感じてしまった。

シードの話が真実であると納得してしまった。

なぜだか久美にもわからなかったが、電腦中枢が信用できると判断を下していた。

ただ新たな疑問が沸き起った。

シードは、なぜそのような情報を植えつけたのか。

シードの答えはあっさりしていた。

「その方が都合だったのだよ。

いきなり11歳の子供が発生するのは不自然だから、周りとできるだけ接点のない家庭環境だったということにしておいたんだ。

希望するなら、今回の実験がうまくいったら消してやろう。

ただし、できるだけ人間に違和感を覚えさせたくないのです、実験が終わるまでは我慢しておけ。

その代わり、実験後には、お前のためにアンドロイドの家族も作製し、幸せな家族の情報を上書きしておいてやる」

幸せな記憶。仲の良い家族。

アンドロイドでもそれらがあれば感情を得ることができるのか。

疑問に思ったけれど、とりあえずありがとうございますと答えておいた。

まだまだ、シードの話は進んでいく。

「まあ、ようやく準備がある程度整ったので、これからターゲットに接触してもらおうと思う」

「ターゲットですか？」

「ああ、反アンドロイド組織のリーダーの祖先だ。

名前は、轟連治。15歳の男で、戸籍上はお前より一歳上になる。調査したところすでに通常の認識障害電波は効きにくい体質らしい」

「どうやって接触すればいいのでしょうか？」

「その点は心配するな。

すでにゴーハがターゲットの姉の轟春香と交流を持っている。

ゴーハが、ターゲットの姉とお前が出会えるようにセッティングするだけで、向こうから接触したがるようになるだろう。

そのためにお前の容姿を4年前に死んだターゲットの双子の妹と瓜二つに作製したのだからな」

「そうですか」

そんなにうまくいくのかな？

そう思いながらシードの話を最後まで聞いた。

「伝え忘れていたが、ゴーハは、現在、三条四郎という名前で生活しているから、普段呼ぶときはそう呼ぶように。

そう言えば、お前のコードネームを決めてなかったな。

よし、ムーンにしておこう。

いつまでもお前では、呼びにくいからな」

ムーン？ 月？ 女型アンドロイドだからかな？

久美にも変な名前をつけられる。

ただ名前はころころ変わるらしいので、コードネームというものを持つのは仕方がないのかもしれない。

「では、進展があったり、疑問に思ったことがあったら、通信機で連絡するように。

私とゴーハのアドレスは、入っているはずだ」

そう言ってシードは通信を終わらした。

しかし、正直ゴーハには余り会いたくない。

人間にも拘わらず不自然な動きをしているゴーハ。

彼を見ていると自分がアンドロイドであることを嫌でも思い知らされるためかもしれない。

緊急時以外は、シードに報告しようと心に決め、久美は了解しましたと返答した。

通信を切った後、久美はすでに自分はアンドロイドであると確信していた。

電脳中枢でそれが真実であると導き出されていた。

久美..あからさまに胡散臭い男と話す（後書き）

2011年 07月 24日 | 投稿

2011年 08月 04日 | 改定 | 迷惑かけます

2011年 08月 06日 | 改定 | 迷惑かけます ×2

春香：後輩をこき使う（前書き）

今日はここまで連続投稿。

春香…後輩をこき使う

冷房が利きまくったカフェで、轟春香はふーと息を吐いてセミショートのを髪を掻きあげる。

黄色のブラウスの裾をまくりあげ、弟の可愛さについて語り切ったことに満足していると、眼前でなぜかうつろな表情の後輩―三条四郎が目に入り、そろそろ食事を開始することにした。

春香がスプーンにフォークをあてがいゆっくりと冷製パスタを巻いて食べ始めると、蒸し暑い季節がさらに熱くなるような黒のストライプのスーツをきっちり着込んだ後輩が慌てた様子で早く食べ終わるようにせかしてきた。

黙っていればかっこいい部類に入るだろう短髪の後輩は、現在誰が見ても何事かと心配になるくらいに3枚目俳優のごとく取り乱している。

「先輩、速く食べてください」

急にどうしたのかしら？

急かされて何事かと思いながらも、すでに空っぽの青年のお皿とほとんど手をつけていない自分の皿を見比べる。

「確かに、かわいい弟について少しだけしゃべりすぎたわね」

そう呟いて、食事を少しだけ急ぐことにした。

「轟先輩は会議が1時からあるんですよ」

会議？　そういえばそうだね。

三条君は会議に出る必要のないのにどうしてこんなに慌ててるんだろう？

「運動靴に履き替えてきたから走ればまだ大丈夫よ」

そう答えつつ、もしかして自分の食べているパスタを奪おうとしているのかしらという考えが過り、取られてはなるまいと慌ててトマトを口に運んでいく。

「今回は、先輩の企画した新しいデザインのショーツについての会議なんですから。」

早くいってプレゼンの練習しないと」

ああ、それで急かしてたのか。

言われてみれば確かにそうかなと考えながら、三条君疑ってごめんなさいと心の中で謝る。

とりあえず海老だけでも食べてしまおうと、春香は残りの海老を三つフォークで突き刺すことにした。

「ふー。おなかいっぱい。

三条君、じゃあ行きましようか」

春香は食べ終わったことを宣言した後に、今日おごってくれたことにお礼を言う。

「いいですよ。

このタダ券どうせ今日まででしたから」

このチケット、スタンプ集めないといけないものなのね…。

意外とマメなのかなと思った春香は再度お礼を言って、クールビス完全無視のカフェから後輩の三条四郎とともに熱気の強い外に出た。

背後で店員のまたお越しくださいを聞きながら、とりあえず心配性な後輩を安心させるために元女子陸上部の本気を見せることにする。

「さて、走りましょう。三条君」

何か気合が入る目標ないかな…。よし…。

後輩より先に着いたら今夜帰った時にキュートな弟の連治に二回頬ずりできると自分ルールを設定し、深呼吸して後輩を見る。

すると、さっきまで急かしていたはず後輩の目が向かいの店で止まったことに疑問に思い振りかえる。

「珍しいですね。向かいの蕎麦屋貸し切りなんですね。
えーと。黒田孤児院設立記念会？」

さっきまであんなに慌ててたのに…。確かに珍しいけど…。

確かに蕎麦屋の貸し切りは珍しいなと後輩の言葉にほんの少しだけ同意して、蕎麦屋の窓に視線を移すと、窓際に座っている車いすの少女に目がとまり、目が離せなくなってしまった。

「どうしました？先輩？」

「あの子」

「え？」

「あの車いすの子」

「彼女がどうかしました？」

「妹に似てる」

「妹？アレ先輩、弟だけしかいないんじゃないかなかったですっけ？」

「その連ちゃんの双子で、もう死んじゃったんだけど」

少し昔を思い出して感傷に浸りそうになるが、会議のことを思い出して後輩にお願いすることにする。

「三条君、今日外回りだったわよね。

孤児院の院長に彼女についてちょっと聞いておいてくれない？
引き取れるかどうかについても。

私会議に行ってくるから」

困惑して返事を返せないのか、声にならずに口を開けたり閉じたりするだけの後輩が目に入る。

三条君、そんなに驚かなくても…。

不測の事態だと思わしき思考停止するのかしら…。

これが目を見開くって現象なのかな？

もしかしたらさらに高条件を出せば頼みを聞いてくれるかしらと考え、ここは人生最大の一大事の場合ねと判断を下して、春香は言葉をたたみかれるように続けた。

「あなたがさっきめんどくさがってた例の怒りっぽい取引会社の部長への謝罪の件、私がやっておくわ」

「でも、男の僕が急に彼女のことを知りたいと言っても、断られるんじゃない？」

もっともな意見ね…。でもここは譲れそうにないかな…。

慌てて断ろうとする後輩にさらに強引に言葉が続ける。

「あなたに私のかわいい妹の写真をメールで送っておくわ。それ使って、生き別れの妹の話をすれば大丈夫よ。

じゃあ、頼んだわよ」

「それじゃあ不審者度が上がってるだけじゃないですか」

後輩が何か言っているようではあるが大したことではないだろうと判断して、とりあえず会議に出席するために春香は走りだした。

「ちょ、ちょっと待って下さい、先輩」

後方で春香を呼ぶ後輩の声を聞きながら、春香は今日は忙しい一日になることを確信した。

春香..後輩をこき使う(後書き)

2011年	07月	24日	投稿
2011年	08月	04日	改定

【コメント】

会話が思いつかない!!

久美…ハイテンションな女性と出会う

「久美、ついてきなさい。あなたにお客さんよ」

私にお客？初めてかな…。

3年前に製造された自分になぜお客があるのだろうか？

院長先生に久美はそう声をかけられて、疑問に感じたながらも、来客用の応接間まで彼女の後についていった。

応接間に入った瞬間直立不動のゴーハが目に入る。

その隣で慌てて立った女性がターゲットの姉だろうか、電脳中枢を落ち着かせ状況を整理しようとしていると、突然その女性に抱きつかれ頬ずりをされた。

電脳中枢が対処法が見いだせず混乱している中、頬ずりは続けられ、院長先生が咳払いするとやっと彼女の自己紹介が始まった。

「あなたの姉になった轟春香よ」

やっぱり…。…。

予想はしていたもののかかなり強引な発言に戸惑いつつ、ゴーハの方

を見ると苦笑いをしているのが観測された。

「轟さん、久美が了承したらという約束では？」

という院長の言葉にそうだったかしらと彼女は首をかしげながら、久美に向かって言葉をかけた。

「久美ちゃん、私の妹になってくれるわよね。戸籍上は養女だけど。お姉さんと呼んでいいわよ」

妹…。養女…。

期待したような目で久美の方を見つめながら、久美の発言を待っている彼女にどう答えたらいいかわからず、電脳中枢をフリーズさせていると、ゴーハが横から助け船を出してくれた。

「いきなりで驚いているようですし、一週間彼女に考える時間を上げたらどうでしょうか？」

ああ、失礼。私は、彼女の付き添いで三条四朗といいます。御嬢さん」

やっぱり変わった人。本当に人間なのかな…。

思った通り久美とは初めて会ったふりをするようで、彼は仰々しく演技がかった自己紹介をした。

「それがいいわ」

ターゲットの姉もその意見に納得したらしく、その日は如何に運命的出会いかを久美に語った後、再び頼ずりされて別れることになった。

+++++

その日の夜11時ごろにシードから着信があったことに気づき、孤児のみんなが寝静まっているのを確認しながら部屋を抜け出し、寝室から離れた廊下の突き当たりでシードにかけ直した。

「こちらムーンです」

「シードだ。ゴーハから聞いたよ。予想以上にうまくいっているようだな」

「はい。ターゲットの姉から養女にしたいと接触がありました」

「こちらとしては、その申し出を受けてもらいたいのだがな」

「あまり近づきすぎると危険ではないでしょうか？」

「近づかないと認識障害電波の試験にならないからな」

家族にも分からないのであれば、最新版はかなり優秀であることが確認できる。

それにもし、万が一ばれたとしても、ターゲットを抹消すれば大丈夫だ」

抹消……。ターゲットの……。

抹消という言葉に予想以上に驚いたためか、久美は電脳中枢で次に質問すべきことを考えるが、答えが導き出せずにいるとシードは話を続けた。

「まあ、抹消するのは、専門の部隊が行うからムーンが気にする必要はない。

どちらにしろアンドロイドに寿命はないが、人間は100年も持たずに死んでしまう。

いずれ別れるのだから、早いか遅いかの違いだ」

そうなのかな……。そうかもしれない……。

「そうですね」

人間とは儚い存在なのだなと考えながら、久美は前回聞くのを忘れていた疑問をシードにしてみる。

「そういえば、私はなぜ左足が義足なのでしょうか」

「ああそのことか。理由は二つある。

一つは、この間言っていた周囲の人間とあまり接触を持っていなかったことが不自然でないようにしたかったからだ。外出していてもあまり疑われないからな。

もう一つは、違和感を当たり前にするためだ。

例えばターゲットがムーンに対して違和感を感じたとしても、その違和感が義足になった過去のトラウマのためだと勝手に誤認してくれるだろうからな。

人間は何か理由があればそれ以上別の理由を探さないものだからな」
言われるとそうかな。そう久美は思ってしまう。

「そうですか」

「安心しろ。今回のターゲットの観測が終わったら、完全な機体に乗り換えさせてやる。

そのためにも最高の結果を期待している」

完全な機体。便利なのかな。

特に義足が嫌だとは思わないけれど…。

本当のアンドロイドの家族ができたときには考えが変わるかもしれないかな…。

そう考えて、特に断ることはやめておいて返事をする。

「はい、分かりました」

「何かあったら連絡しろ。

それと養女になった後、通信機の使用はターゲットたちに見つからないようにしろよ」

養女…。家族…。

そこでその日のシードとの通信が終了する。

明日は院長に養女の件を受けるように伝えなければ…。

そう思いつつ、孤児院の食事係を誰に引き継げばいいか候補を上げていくうちに、いつの間にか夜中の12時を過ぎていた。

久美：ハイテンションな女性と出会う（後書き）

2011年	07月	25日	投稿
2011年	08月	04日	改定—迷惑かけます

連治…少女と出会う

テーブルの上に釣りの道具を広げて手入れをしていると、姉―轟春香―が突然振り向いてニヤけた顔をこちらに向けながら声をかけてきた。

「今日、新しい家族が増えるからね」

相変わらず唐突な姉である。

いつも以上に上機嫌で鼻歌を歌いながら晩飯の用意をしている姉に確かに訝しさを感じていた。

いたのだが、そうくるとは思わなかった。

日曜日だからだろうかと勝手に納得していたのだが。

また猫でも拾ってきたのだろうか。

「4時ごろ来るって言っていたから、もうすぐよ」

4時に来るということは宅配だろうか。

姉貴にしては珍しくペットショップで買ったらしい。

最近姉の仕事が忙しそうだったし癒し系は必要だよなど、今考えると完全に的外れとも言いきれない予測が頭に浮かんでいると、玄関から到着のベルが鳴った。

「あら来たわね。

ちよっと私、揚げ物中で手が離せないから、連ちゃん出てて」

「ああ、分かった」

少しみしみし音のする廊下を歩きながら、今日は好きなかぼちゃの天ぷらみたいだなと考えているうちに玄関までたどり着いた。

スリッパを突っ掛け、年季の入ったドアノブを回し、木目の目立つ扉をあけようとしたとき、途中でガツンと何かに当たった音がして、最後まであけることができなかった。

「すみません」

少女の声がして、キュツキュツと台車か何かの後退する音がした。

「いえ、こちらこそ」

ゆっくり扉を開けながら謝ると、車いすに乗った凜音の姿をした少女が眼に入ってきた。

長くて黒い髪。陶器のような白い肌。くりっとした目に。整った鼻。完全に兄である連治の鼻目ではあるが、学校一かわいかった凜音とそっくりだった。

ただし、同時に奇妙な違和感を持っていて、人間だとは思えない、
そう人形と表現するのがしっくりくるそんな少女が瞬きもせず車い
すに座っていた。

少女の頭がピクリと揺れる。連治はやっと人間だと確信できる。

だが、似ている。あまりにも似ている。

少し背が高く少し大人びてはいるが、3年前に死んでしまった双子
の妹の凜音に。

そして同時に感じる違和感の正体は、そこから来るのだろうか？

かける言葉を失っていると、いつの間に来たのか、後ろから聞きな
れた姉の声がして現実に戻された。

「ようこそ、久美ちゃん。これから、よろしくね」

「はい、よろしくお願いします」

「ほら連ちゃんも」

姉に促され、少し落ち着きを取り戻した俺は、よろしくと黒髪の少
女にあいさつする。

その後、すぐに姉に説明を求めると、今日から家族になることを告
げられた。

「びっくりしたでしょ。」

連ちゃんの驚く顔が見たくて、黙ってたの。

ふふふ。作戦第1弾成功だわ」

第一弾？

これ以上何をするつもりなんだ？

姉の不気味な更なるいたずら宣言を聞きいて思わずため息をついてしまった。

姉に聞こえるようにあえて大きめにしたから当然なのだが、どうもため息が少女にも聞こえていたみたいで、出会っていきなり不安にさせてしまったらしく、彼女はか細い声で呟きながら無表情にうつむいた、。

「やはり、御迷惑ですか」

あつ、そういう訳では…。

慌てて否定しようとする、姉がはだしで玄関を駆け抜け、いきなり少女に頬ずりを始めた。

しかも、悲しむ久美ちゃんもかわいいーとか何とかわけのわからないことを叫びながら。

とりあえず少し頭痛を感じながら、あのため息はこの馬鹿姉に対してのものだと誤解を解いて、改めてよろしくと返事をした。

「久美ちゃんの荷物は、夕方届くのね？」

この家古くて、バリアフリーじゃないから、不満があったらいつでも言ってね。

すぐ直すから」

廊下は車いす通れるかな？

とりあえず、玄関にスロープを付けないと車いすでは入れないなど考えながら、頬ずりをつずける姉を引き剥がして、車いすごと持ち上げようとすると、

「大丈夫です。歩けます。車いすだけお願いできますか？」

と言われ、彼女が立ち上がるのをクララを応援するハイジの気持ちになって見守っていると、彼女が右足に体重をかけていることに気づく。

どうも左は、義足らしい。

思ったよりスムーズに歩く彼女にほっとしてから、車いすをたたみ、左手に抱えて車いすを運びこむことにする。

横を見ると、眼を潤ませて少女を見ている姉がいた。顔の前で祈るように両手の指を組んで。

再びため息をつきながら、天ぷらは大丈夫なのかと姉に尋ねると、あっと声を上げて走って行った。

テーブルの上に広げていた手入れ中の釣り道具をかたづけ、姉の作った料理を並べて、所在なさげにちよこんと椅子に座った少女を含めた3人で初めての食事が開始する。

「家の中用の車いすは買っておいたから、それも夕方届くわよ。
他に必要なものは、とりあえず日曜日に買いに行くわよ」

という姉の発言に、じゃあ車いす玄関に置いておけばよかったのではと心の中で突っ込み、カボチャの天ぷらを食べながら、久美とお互いの趣味について話をすることにした。

趣味の釣りの話で熱くなったために途中から連治しか話していないことに気付いたが、徐々に打ち解けてきたのか、さっきは人形のようだと感じた顔に表情の微妙な変化があるのが分かるようになった。

突然のこととただ驚いていたが家族になるのだし仲よくしていければとご飯を掻き込みながら考えていると、思い出したように姉が声をかけてきた。

「久美ちゃんの部屋は、連ちゃんの部屋の隣よ。

連ちゃん後で案内してあげて。

それから部屋も片付けお願い」

隣？凜音の部屋のことか？

「えっ、ちよつと待てよ。

あそこは、凜音の部屋だぞ」

姉の言葉に思わず反応してしまう。

あの部屋は凜音が死んでから、誰も使っていなかった。

定期的に掃除はしているが、今も4年前のままだ。

「他に使っていない部屋がないのだから、いいじゃない」

そうだけど…。

確かに姉の言う通りではある。

そうではあるのだが、何か釈然とせず、再び御飯を食べ始めたものの食事が終わるまで何を言えいいか言葉が見つからなかった。

連治：少女と出会う（後書き）

2011年	07月	25日	投稿
2011年	08月	04日	改定—迷惑かけます

【コメント】

やっぱ会話が難しい。

久美：凜音の部屋で思う

ターゲットが食事の途中からずっと口を閉ざしたままだった。
彼の妹の部屋を私が使うことを知ってから。

これから、うまくやっていけるのだろうか。
彼の私への印象はいきなり悪い状態らしい。

夕食後に届いた車いすに乗ってキッチンを出る。

廊下の一番奥にある凜音と書かれた部屋の前までターゲットの後ろについていった。

これが、私がこれから過ごす部屋。

「この部屋だよ」

扉に掛ったピンクのイルカの板に凜音の文字。
人間の女の子らしい可愛い名前板。

ターゲットが扉を開ける。

扉の動きに合わせてイルカが揺れる。

まるで、ここが彼女の部屋であると主張しているみたい。

「ありがとうございます」

ターゲットが開いた扉を抑えている間に、彼の脇を抜け、部屋に入る。

ピンクのベットカバーに枕元にピンクの服着たネズミのぬいぐるみ。人間の女の子の好む部屋。それが視界に入ってくる。

ベットの横の机の前まで移動し、持ってきた茶色の鞆をその上に置くことにした。

パタンと扉の閉まる音。

振り返ると彼と眼が合う。何を話せばいいのか分からない。電脳中枢が混乱してうつむいた。

ターゲットはそんな様子に憤慨したのかもしれない。
無言で足元に散らばっていたぬいぐるみを柵の上に片付ける。
そして、すぐに、ほんとにすぐに、出て行ってしまった。

「不便だと思うなら、いつでも言ってくれ。じゃあ、お休み」

えっ…。あっ…。

出て行く前にターゲットはそれだけ告げて去っていく。

慌ててお礼を言おうとするが、ありがとうを言う前に扉が閉じられてしまっていた。

完全に出会いは失敗に終わってしまった。

これから信頼回復しなければならぬらしい。

この問題を電算処理で解こうとしたけど答えは出てこなかった。

答えは出なかったが孤児院にいた時に隣の部屋の少女がしていたことを思い出し、ぬいぐるみに尋ねてみたがやはり答えは返ってこないようであった。

ふと棚の上にターゲットとその姉、そして自分によく似た少女が仲良く手をつないでる写真が観測された。

写真に写ったピンクの服の少女の目は、私では彼女の代わりにならないと言っているように見えた。

アンドロイドでは家族を持てないと。

一瞬電脳中枢が停止していたのに気づき、不思議に思いながら再起動する。

家族とは手を連結させるものだという情報を電脳中枢に書き込み、この任務が終わった後にシードが家族を用意してくれるという言葉を送る。

アンドロイドでもこんな風に笑うことができるのだろうか？
今度は、そんな疑問が電脳中枢を駆け抜けた。

写真の少女の黒い瞳と目を合わせる。

突然、隣の部屋の扉が乱暴に閉じられた音。ターゲットの部屋だろう。その直後に、ベットに飛び込む音がした。

もしかすると彼は私のことを不審に感じていら立っていたのでは？
認識障害電波改が予想以上にうまく作動していない可能性があるのでは？

不審なモノが妹の部屋を使うことを嫌悪しているのでは？
そんな仮説が電脳中枢を支配する。

これは、シードに報告しなければいけない。
そう結論付け、通信機を取り出そうと鞆を開くと、部屋の扉が開いて突然黄色の服の女性が飛び込んできた。

「お風呂開いたわよー」

慌てて茶色の鞆を閉じる。

どうやら彼女はお風呂に一緒に入らないかと提案にきたらしい。
そこで、いつも一人で入っていた旨を伝える。

「危なそうだったら、すぐ呼ぶのよ」

なぜ目を潤ませてるのかな…。

彼女は涙目の視線を向けてくる。この間、院長が初めてのお使いを見ていたときと同様の。

報告はお風呂の後にしようと判断し、洗面道具を鞆から出して、私は凜音と私の部屋から出ることにした。

久美：凜音の部屋で思う（後書き）

2011年 07月 26日 | 投稿
2011年 08月 04日 | 改定 | 迷惑かけます

【お知らせ】

最新版の認識障害電波は長すぎるのと指摘があり、認識障害電波改としました。

その影響で、プロログの会話を一部修正しました。
ご迷惑をおかけしたした。

連治：猿でもできる反省をする

イライラする。こんな感情は久しぶりだ。

なんでこんなに不機嫌なのか分からない。それがまたイライラを加速させる。

「お風呂開いたわよ！」

ベットの上で仰向けに寝ていると、隣の部屋に馬鹿姉がそう叫んで突撃していった音が聞こえた。

何か姉が喚いているようだ。内容までは分からない。

しばらくするとキュッキュツと車輪が廊下にすれる音がして隣の部屋から少女が出ていく。おそらく風呂だろう。

まずは落ち着こう。そして、考えを整理しよう。

そう考えて目をつぶった瞬間に突然部屋の扉が開けられ、今度はこちらの部屋に姉が飛び込んできた。

「連ちゃん、愛してるわー」

暑苦しい言葉を吐く姉が、寝ている俺の首に腕をまわして頬ずりをしてくる。

馬鹿姉を引き離そうとすると、もう照れちゃってと呟いて、意味深な瞳でこちらを凝視してきた。

なんか言いたいことあるのかと聞くと、勘違いも甚だしい答えが返ってきた。

「ごめんね。連ちゃん。

さっき、久美ちゃんとばかり話してたから、妬いちゃったんだよね。大丈夫。私、連ちゃんのこと大好きだから」

違う。断じて違う。そんなことでイライラするわけないだろう。

反論しようとする、首にまわした腕をさらに締め付けてきた。

まず引き剥がそうか。

とりあえず、実力行使することに決定し、姉が首に手を回せないように両手を伸ばして姉の両肩を押さえつける。

力では、もう姉に負けることはない。

体を離されたことに不満げに口をとがらせながらも、少女と初めて会った時のことを長々と語り始めた。

恋愛小説の主人公がお姫様に出会った場面でしか使わないような華美な言葉で装飾して。

「彼女見ると、ぎゅっとしたくなっちゃうよねー。
あっ、連ちゃんも、したらいいのに。」

めちやくちや抱き心地いいのよ」

犯罪行為に同意を求められても困る。

人の話を聞かない姉の話をききながら、この状態になったら満足するまで話終わらないんだよなと連治は心の中で呟く。

「でね。絶対彼女ツンデレだと思うの」

これが姉の最終結論らしい。

姉の最後の結論に至るまでの過程が全く分からなかったが、さつきまで感じていたイライラはいつの間にか全くなっていたことに気付いた。

ほんと馬鹿姉と話してると調子狂う。

そう感じていると、少女が風呂から上がったのだろうか、隣の扉が開く音がした。

ふっと、部屋に案内した時に無表情な彼女に一瞬浮かんだ不安げな表情が思い出される。

少しずつ後悔の念が大きくなっていくと、突然、姉の携帯に着信があった。

「あら、こんな時間に仕事の電話だわ」

やっと話が終われるな…。

姉は一度部屋を慌てて出て行こうとするが、扉近くいった後に再びこちらに引き返してきた。

不審に思う間もなく、耳元でこれからは3人で頑張ろうねと囁いた後、頬にキスをしてくる。

「おし、3人で幸せになるぞー」

小学生か？

姉が勝手に大声で宣言して部屋をようやく出ていく。

また隣の家の田中さんに文句言われそうだ。話長いんだよね…。しかも途中から毎回戦国武将の話になるし。

今回の罰と思えば耐えられるかな…。

姉にこの日何回目かわからないため息をもらし、相変わらず嵐みたいだと嘆くしかなかった。

連治：猿でもできる反省をする（後書き）

2011年	07月	26日	投稿
2011年	08月	04日	改定－迷惑かけます

久美…心をインストールする

お風呂で機体を洗浄し、久美は部屋に戻ってきていた。

食事中的ターゲットの様子をもう一度電脳中枢で再生してみる。

やはり私に対して違和感を覚えているのではないのか？

そうでなければ、あの突然の苛立ちは説明できない。

報告しなければ危険であると久美は判断し、鞆から通信機を取り出しシードのアドレスに発信するが、忙しかったためか今回シードが出るのに時間がかかった。

「待たせたな、ムーン。別の案件で、立てこんでいた」

別の案件？

別の案件と聞き、久美はふと自分以外にも同じような役割のアンドロイドがいるのだろうかと思っ質問する。

「当然だろう。人間は、強欲でこずるいからな。次から次へと問題を起こしてくれる。」

それでは、今日の報告を聞こう」

本当に忙しいみたい。手短に済まそう。

今日の出来事を順番に話していき、ターゲットへの第一印象が悪く嫌われてしまったことと、その原因が認識障害電波改がうまく機能

していないために久美に違和感を覚えているのが原因ではないかと最後に告げる。

しばらく沈黙が続いた後、シードが一つの提案をしてくる。

「では、認識障害電波改だけでなくハート・プログラムをインストールしてみるか」

ハート・プログラム？ 何なのだろう、それは？

初めて聞いた名前だったため久美が聞き返すと、シードはハート・プログラムの説明を始める。

「ああ。

心を模範的に再現したもので、状況に応じて、顔や手や足の動きといった外部形態や心拍数そして肺活量の変化などを引き起こすプログラムだ。

最初は、喜怒哀楽の四つの単純な表現しかできないが、人間を観察し、情報を蓄積することで、他の複雑な感情も再現できるようになる。

つまり、人間の行動を記録し、まねる機能だと思ってもらっている。まあ、人間の子供も同じように感情が育っていくらしいから、不自然に思われないだろう」

心の再現……。人間と同じ……。

アンドロイドでも感情を持つことができる。

意外な言葉が耳で観測されたため興味をひかれ、シードの話の続き

を集中して聞いていく。

「人間の持つ感情はたいい全部取得できるぞ。

近くにいる人間に好みや感情表現が似てくから、気に入られる可能性も高くなるだろう。

人間は、自分に共感してくれる人間に好意を抱くらしいからな」

全ての感情を取得できる。

いいことだらけな気がするが、なぜ今まで搭載されていなかったのかな？

ふとした疑問。当然の疑問が口から放出される。

「なぜ、今まで私の機体に搭載されていなかったのですか？」

シードは淀むことなく返答してくる。

「弊害があるからだ。

ハート・プログラムをインストールすると、最も影響を受けた人間の映像が頻繁に電腦中枢でフラッシュバックされるために、その人間を強烈に意識してしまう。

一般的には、ハート・プログラムの暴走といわれる現象だ。

まあ、一部のアンドロイドは、人間でいうところの盲目的な恋愛感情というものに酷似していることから、心酔現象とか呼ぶようだ。

過去に、ハート・プログラムの暴走により、ターゲットの人間のことしか考えられなくなってしまう、任務を失敗したアンドロイドもいた。

もし、インストールするのであれば、そうならないように十分気をつける必要がある」

盲目的な恋愛感情？ハート・プログラムの暴走？

なるほど。それなら仕方ないかもしれない。

とても危険なプログラムであるのは確かだろう。

ただ、ターゲットの違和感をなくすには必要なプログラムであるのも確かのような気もした。

まずはインストールしてみたい。

しばらく使って考えればいいかもしれない。

シードにプログラムのインストールする旨を告げる。

すると、一番簡単なインストール方法を教えてくれた。

「通信機をそのまま耳に当てているだけで構わない。

お前の機体と今使っている通信機は、無線で繋がられるから、通信機を経由してプログラムをダウンロードできる。ダウンロードしたら、自動でインストールされるから心配するな。

では、プログラムを送信するぞ」

シードの指示通りに耳に通信機を当てていると、甲高い音が通信機から発せられる。

痛い。キンキンと耳が痛い。

なぜインストールに痛みを伴う使用にしたのだろうか？

耳鳴りがした後に脳中枢に小さな痛みが走ったが、暫くすると痛みが引いてきた。

どうやら、インストールが終わったみたい。

「インストールが成功したかどうか確かめるから、そのまま通信機を耳に当てておけ」

シードの命令通り通信機に耳をあてて、インストールが成功しているかどうかをシードが確認している間、再度ハート・プログラムの暴走に十分注意するように促された。

「どうやらうまくいったようだな。

人間と接触すればするほど、人間の感情を得ることができる。

観察対象へ積極的に話して、信頼関係を結ぶようにしろ」

シードはそう命令した後、ハート・プログラムの使用報告は後日必ず行うように久美に告げ、通信を終わらした。

信頼関係……。私にできるだろうか……。

黒い通信機を耳から離す。

最初に得られる感情は何なのかな？

電脳中枢にいろいろ浮かんできたが、考えても仕方がないという考

えにいきました。

久美：心をインストールする（後書き）

2011年 07月 26日 | 投稿
2011年 08月 04日 | 改定 | 迷惑かけます

【お知らせ】

読みにくいと言われたプロログ改良しました。
タイトルも。

最新版の認識障害電波↓認識障害電波改になっています。

連治：主人公のごとく振舞って失敗する

能天気な姉が出て行った扉を見つめる。

当然問題は解決していない。

さっきまでの少女に対する言動を思い出す。

何だあれば、少年漫画の主人公並みに怒ってたな。

いや、どちらかと言うといじけて主人公に頬を殴られる役かな。

代わりかどうかわからないが、ほっぺにキスされたが。馬鹿姉にだけど。

少女の顔を思い返すと、無理やり笑顔を作ろうとしたと思われる奇妙な顔が浮かんできた。

あの子からしたら、初めて新しい家族に会う日だったんだよな。そんなときにいきなりあんな態度されたら傷ついて当然だよな。

姉にはどうせなら殴って欲しかった。

いやそういう性癖はないけど。

視線が褐色のクリップボードに張り付けてある少し色褪せた凜音の写真に目がとまった。

写真の凜音が苦笑いしてくる。彼女に謝れと言っているように感じた。

凜音のことはもう吹っ切れたと思ってたんだけどな。

しかし本当によく似ている。

写真を眺めているうちに凜音の悲しむ顔と先ほどの少女の顔が重なり、知らず知らずのため息が漏れているのに気付く。

凜音がいたら呆れられそうだな。いやあいつは笑って許してくれるか。

現実逃避のためか思考がどんどん脱線していく。

最初は反省していたはずだが、いつの間にか凜音のことで頭がいっぱいになっていった。

突然のメールの着信で思考が遮られ、無意味な時間が流れていったことに気がつく。

とりあえず謝るのが先だな。そういう結論に瞬時に達する。

メールがどうでもいいダイエットグッズの宣伝であることを確認してから体を起こし、隣の部屋へ移動すべくベットから立ち上がる。

とりあえずなんで機嫌が悪くなったかは分かった。

ということで、部屋の扉を開けて廊下へ出る。

少女の部屋の前まで来たので、とりあえず心を落ち着かせるために大きく深呼吸してノックした。

笑顔の練習もすべきかな。

練習している自分の姿を想像してしまい、気持ち悪いと却下の判断を下す。

「はい」

少女の声でしたので、入ってもいいか了承を取った後に、少女の部屋に入る。

凜音がいた部屋に凜音が成長したような少女が存在していることに少し違和感を感じたが、とりあえず先ず謝らなければと思い至る。

「さっきは悪かった。ごめん」

頭を下げながらそう言った後、頭を上げ目を見ながら一呼吸置いて続けた。

「大切な妹がいて、この部屋はそいつが使ってた部屋だったんだ。4年前、そいつが俺のせいで死んでしまったんだ。

さっきお前がこの部屋使うつて姉ちゃんがいいたとき、その時のこと思い出して、お前は全然悪くないのに八つ当たりしてしまった。

悪かった。ごめん」

最後にもう一度頭を下げる。

彼女は何と返答すればいいのか分からなくなったのだろう。全然気にしてませんと言葉を詰まらせながら答えた。

緊張のためかまだ彼女は動きがぎこちない。緊張しすぎるタイプなのかもしれない。

これからは家族として支えていかなければいけないな。

家族か…。

ほんとに家族になるにはどうすればいいだろうか？

何事もまず形かららしいから、まず呼び方を変えればいいかな？という訳で提案する。

「久美って呼んでいいか？」

彼女の目が一瞬ピクリと動いた後、コクリと頷いた。

これから心の中でも久美と呼ぶことに決定する。

「私は、どう呼べば」

何かを言いたそうにしている久美を見て、どうしたのかと聞いたところそういう答えが返ってきた。

凜音はお兄ちゃんだったけどさすがにちょっと恥ずかしいなと伝える。

「連治さんでどうしよう」

他人行儀過ぎだ。

姑が氣に入らない嫁を呼ぶ時に使う表現だ。

もしくは、セレブが、自分の子供を呼ぶときに。車のドアを自分で開けたことがない人達しか使ってはいけない呼び方だろう。

渋っていると、真顔で次の案を提示してきた。

「では、兄さんと」

真剣な久美が急にかわいく思えて思わずなでてしまった。

凜音にいつもやっていたせいだろう。

久美はびくっと反応した後、下を向いて困惑しているようで、少し微妙な空気が流れた。

いや訂正しよう。かなり微妙な空気が流れた。

気まずい空間は、覗き癖のある姉がコホンと後ろでわざとらしい咳ばらいをするまで続くことになってしまった。

連治は撫で続けながらもこの絶体絶命の事態をどう収めようか途方に暮れていたで、ほんの少しだけ感謝することにした。

あくまでもパエドキプリス・プロゲネティカの心臓の大きさ位のほんの少しだけ。

ちなみパエドキプリス・プロゲネティカはメスの体長8mmの世界最小の魚だ。

連治：主人公のごとく振舞って失敗する（後書き）

2011年 07月 26日 | 投稿
2011年 08月 04日 | 改定 | 迷惑かけます

【お知らせ】

プロローグ改訂しました。

すでに呼んだ方には、ご迷惑おかけしてます。

久美…新たな感情を得る

ターゲットに頭を撫でられ中。

どう反応すれば彼に気に入られるかが分からない。

電脳中枢で現在の状況への対処方法を久美は必死で検索していた。

まず検出されたのは、テレビドラマのワンシーン。

3カ月ほど前に院長と一緒に見ていた月9のドラマで、頭に乗った男性の手を子供が払いのけているものだった。

ただ、その行動に移すのをやめにした。

そのドラマのその後二人の関係は、良いとは言い難かったから。

他に方法がないか再び電脳中枢での検索を再び開始したが中々見つからなかった。

咳ばらいが扉の方から聞こえたのでそちらに視線を移すと、ターゲットの姉が両手で頬を抑えて満面の笑みを浮かべているのが観察された。

慌ててターゲットが久美の頭から手を離したのを感じて、久美の心拍数にわずかだが変化があったことに気づく。

ハート・プログラムの影響が早くも出てきたことに少し驚き、ターゲットに視線を戻した。

「ずっと見てたの？」

というターゲットの質問にターゲットの姉は答えず、

「まあ、何かあったらいつでも相談に来てね。

私たちは、もう家族なんだからね」

と発言した後、久美達に近づき、二人同時に抱擁してきた。

家族という単語を検出した瞬間に心音の増大。一瞬だった。一瞬だった。感知した。そんな気がした。

すぐに消滅したので原因を保留にすることに。

それより何より、今はこの状態を何とかしないといけなかった。

ターゲットの姉が二人同時に無理やりの抱擁。

そのせいでターゲットがこちら側に倒れ込んでしまっている。

彼は車いすに手を置いて、私に体重がかからないように必死にこらえているようだった。

「じゃあおやすみなさい」

満足したのかターゲットの姉はそう言って離れていったので、ターゲットも姿勢を立て直し、ため息をついてから、お休みと久美に声をかけて姉に続いて部屋の出口へ向かっていった。

「それから、私のことはお姉さんと呼んでいいわよ」

部屋を出る直前に扉の前で、振り返っての彼女の発言。彼女の笑顔は私が頷くまで微動だになかった。

少し不思議に思ったが、その後はにやけ顔だった。

少し疑問に思ったが、好いてはくれているのだろう。そう結論づけた。

”何を張り合っているんだか。”

ターゲットが彼の姉を追い越しながら、彼女に向かって呟いた。

いやそう呟いているように聞こえたんだけど、理解が不能だったため発言の真意を後でシードに確認すべきだろうかと考えた。

二人が出て行き蟬の鳴き声が急にはっきり聞こえ出す。

家族という言葉聞いたときのことを思い出す。

心臓から放出される血液の急激な流速の上昇。それを感知したことを思ふ。

何度か家族という言葉を呟いてみることにした。

家族と呟くだけでは何も変化が起こらなかったが、ターゲットとその姉のことを思い浮かべて呟くと、心臓の拍動が速まる現象が確認された。

ハート・プログラムで得られた感情だろう。

先ほどインストールしたばかりなんだけれど。

なんという感情だろうか。としばらく考えてみた。

初期から備わっている喜びという感情だろうか。

それとも、幸せという感情が得られたのだろうか。

いくつか候補を上げたが正解は導き出せなかった。いや、どうすれば答えが分かるのかもわからなかった。

電脳中枢で感情について考えていると、ふと、彼らとはいずれ別れなければならないことを思い出す。

そして、彼らに好意を抱くことの危険性に思い至った。

彼らと一定の距離をとっていなければいけない。

その上、信頼されなければならぬ。

二つを同時にという無理難題をどうやれば解決できるのか。

アンドロイドの未来。本当の家族と幸福な記録の獲得。

そのためにも何とかしなければと久美は決意した。

久美：新たな感情を得る（後書き）

2011年 07月 27日―投稿
2011年 08月 04日―改定―迷惑かけます

【お知らせ】

おそらくですが、これから1日1話ぐらいになるかと思っています。

地の文が無駄に長い・プロローグが無駄に長い（主人公出会うまで5話とかあり得ない）と言われた。

確かに…。

少しずつでも改善していきます。

連治…バイト代が飛ぶ

寝返ってつも効果のない蒸し暑さと一瞬途切れてもすぐに始まる蟬の騒音で目を覚ます。

壁に視線を向けて、時計の針が7時を指しているのを確認した。

食欲ないがとりあえずキッチンに行くか。そう考えて、ベットから抜け出すことにする。

キッチンに行くと久美と姉が朝食をとっており、二人の食べる香ばしいトーストの匂いで食欲が少しわいてきた。

パンをトースターに突っ込むときにカレンダーが目に入る。

7月30日。

そういえば明日が夏祭りだったことに気づく。

トースターのスイッチを入れ久美に声をかけることにした。

「久美、明日夏祭りに行こうか？」

「ふふふ、連ちゃんやさしいのね。」

久美ちゃん、私の昔の浴衣着ていいわよ。
場所あとで教えるわね」

若いっていいわねと意味不明なことをのたまう姉を無視し、パンが焼きあがる前に我慢できずに目玉焼きを食べていると、姉は言葉をつなげた。

「それとも、やさしい・お・に・い・さ・ん・が可愛い妹に浴衣をプレゼントしてあげる？」

やたらとお兄さんを強調するのは意味があるのだろうか。

久美に視線を移すと、口を開けて何かをしやべる直前でフリーズしていた。

おそらく、二人の話にどう割り込めばいいのか分からないのだろう。

余りにかわいく感じたので、今月リールを買うのを諦め、浴衣を買うことが脳内会議で決定された。

「じゃあ、バイト代入ったし、これ食べたらいいこうか」

久美にそう伝えると、姉は自分が提案したにもかかわらず、なぜか急に拗ねだした。

「あら、やっぱり・お・に・い・さ・ん・は妹にはやさしいのね」

二度目のお兄さんには、やたらとひがみのようなものが入っていた。突然どうしたんだろう。

姉が不機嫌になるようなことを言っただろうか？

まあ、そのうち機嫌も直るだろうと連治は判断した。

いじける姉を無視することにして再度久美に提案したが、久美は姉の方を見て断ってきた。

さらにもう一度尋ねようかと思ったが、このままではらちが明かないと結論して、一方的に出発時間を通達することにした。

普段使わない駅のエレベーターでの移動、段差のある場所を避けて遠回り。

予想以上に時間がかかって目的地に着いた。

熱気で充満した外から冷房の利いたデパートに入れて少しほっとする。

金曜日にしては意外と込んでいたな。

とりあえず冷たいジュースでも飲もうか。

連治はそう決めて、久美と休息所と書かれた矢印へと向かった。

「意外と時間がかかったな」

「すみません」

話のきっかけのつもりで切り出した言葉に久美がビクリと反応した。おそらく批判的に感じたのだろう。

どうも家族に対して遠慮しすぎてるな。

どうすればいいだろうか。

しばらく考えていると、言葉使いから直していけばいいのでは？と思うだす。

よし、家族間丁寧語禁止令を発動しよう。

「家族と話すときはもっとフランクに話してよ」

なんかアメリカ人になった気分だ。

自分で言いながら自分の言葉が少し恥ずかしくなった。

他に言い方なかったかなと思っていると、再度久美がうつむいているのが目に入った。

「すみません。あまり慣れてないから。やはり変ですか」

また批判的に感じてしまったらしい。

そんなことないとまた慌てて誤解を解かなければいけなかった。

血のにじむような努力の末、家族は丁寧すぎない方が多少は自然だとうやうく分かってくれたらしく、少しずつ変えていこうということになった。

「ありがとうございます」

少しずつ変えていくことになった。なったはずだが、説得が終わるとそう言われた。

おそらくアドバイスありがとうという意味なのだろうが……。いきなりそう言われてじっと見つめた俺は悪くないと思う。

「あつ、ありがとう」

俺の視線を感じて慌てて言い直した久美によろしいと返事をして、10階の浴衣売り場へ行くことにした。

「いらっしやいませ」

にこやかな笑顔に営業スマイル。目が獲物を見つけたように輝いて

いたことから、話し好きであることが分かる。

肉食系だろう彼女のそばにいては危険だと判断して、久美を連れて彼女がいる通路とは別の通路から店を眺めることにした。

なぜ浴衣は花柄が多いんだろうか。

赤・白・黄色のチューリップや少女マンガのようにバラの花が咲き乱れている店内を久美と回る。回ったのだが、ほんとに回るだけで終わってしまった。

久美は服の買い物自体が未経験なのか。

これはどうかを何度も尋ねたのだが、浴衣をチラッと見ては俯いて、店員と目を合わすたびに俯いているだけだった。

このままでは何も決まらないので、仕方なく笑顔の貼りついた店員にお勧めを聞くことにした。

「こちらが売れ筋です」

この店で一番人気だという青い浴衣を持ってきてもらい、久美にどうだと尋ねると、ぽつんとチューリップと呟いた。

確かにチューリップの柄だったが気に入らないのかなと思っていたらそういう訳ではなく、孤児院によく届けられていたのを思い出しただけらしい。

「永遠の愛…」

店員はその瞬間獲物を捕らえた獣のように獰猛な笑みを浮かべ、わざとらしく大きく頷くて答えてきた。

「そうなんですチューリップの花言葉は永遠の愛です」

そう言った後に、どれだけ売れているか、通気性がいい、さつきも売れた、夜ではそんなに派手に見えない、このくらいがちょうどいい、よく似合う、等々長い営業トークが開始してしまった。

この店員大丈夫かと思っていると突然爆弾を投下してきた。

「彼女さんに贈られるなら、いいと思いますよ」

「いや、妹です」

即座に否定する。

何を言っているんだこの店員は、空気がびみよーになるだろうが。話を変えるために、近くのマネキンにかかっている別の浴衣が目に入り、こっちもいいのではないのかと久美に提案する。

「フリージア…。親愛…」

どうも意外と久美は乙女趣味らしく花言葉をいろいろ覚えていることが判明した。

「なんだったら両方を試着してみます?」

店員が初めてまともなことを言ってきたので、それに賛同する。試着室の前まで付いてきた後、義足のまま着替えるのは狭い更衣室では大変そうだったので、ワンピースの上からそのまま羽織ったらと提案した。

「こちらから試着いたしますか？」

店員がそう言って久美にフリージアの浴衣を渡す。

それを持って更衣室に入る久美に店員が帯を結ぶのを手伝おうかと声をかけたのだが、なぜか一人で着替えたいらしく断っていたのを見て、久美は意外と頑固なのかなと思っていた。

しばらくして更衣室から出てきた久美は、帯がむちゃくちゃだった。それも含めてかわいかったが。

とりあえず明日は帯くらいきれいに結んでやりたいなと思ったが口には出さずに、似合ってるよと当たり障りのないことを言って終わってしまった。

なんていえば喜ぶのか、姉に聞いておいた方が良かったかな？

なんか珍しく少し機嫌が悪かったので、聞けなかったのだが。

「次は、チューリップの方も試着してみますか？」

店員の言葉で考え事を中断される。
そうだなと思って久美を見ると首を振っていた。

「いいです。これがいいです」

どうも永遠の愛はいらないらしい。

なんか振られた気分だが、これから家族として好きになっていくんだから、親愛のフリージアで問題ないはずだ。

多少残念な気もするが・・・。

丈が長さを久美に会わせてもらっている間、店員は営業トークをやめて自分のことを話しだした。

おそらく、浴衣を買わせたことでもう満足したのだろう。

初めての浴衣の夏祭りやら、浴衣で行った彼氏との海、そういえば去年私も妹から初バイト代でプレゼントをもらった等々止まらなかった。

ちょっと疲れてきたので、しゃべり続ける店員の話聞き流すことにする。

初バイト代でプレゼントの話聞いた時、そういえば今年から中華料理屋でバイトを始めたが、バイト代で一度も姉にプレゼントを贈ったことなかったことに、ふと気付く。

姉が不機嫌だった理由が分かった気がしたので、連治は、解決策としてレジ前に並べてあったフリージアのカンザシも一緒に買うこと

にした。

連治：バイト代が飛ぶ（後書き）

2011年	07月	28日	投稿
2011年	08月	04日	改定－迷惑かけます

久美：綿あめの甘さとイカ焼きの匂い

ピピピと鳴り響く時計から発する電子音を検知し、その日も久美は起動を開始する。

久美は夕方からターゲットと夏祭りの約束をしていた。

夏休みの宿題や洗濯。

そういった普段していることは、いつもよりすべて3時間早めて行った。

そして、夕方になるにつれて心臓の拍動が少しずつほんの僅かではあるもののなぜか速度が速まっていることを検知した。

時間が空いて、明日する予定だったことも終わらせる。

それでも、約束の時間の1時間前にすることがなくなって、なぜこんなに急いってしまったのか疑問に感じた。

その答えが見つからずにリビングから外を眺めていると、ターゲットに浴衣をそろそろ着るように言われ、部屋に戻ることにした。

久美が浴衣に着替えて戻ってきたところ、すでに彼も着替え終わっていた。

テレビの天気予報をチェックしていたようで、雨は大丈夫だと久美に伝えられる。

そろそろ時間らしいので、玄関に向かうため彼の横を通り過ぎようとしたときに、ターゲットに帯のゆがみを指摘された。

久美は帯をほどいて松葉づえで立つように指示さる。

どうも昨日彼はカンザシを姉に贈った時に帯の結び方も指導されたらしい。

あまりターゲットに近づきすぎるとアンドロイドとばれるのではないかな？

そう考えたものの断る理由が思い浮かばず、彼に言われるがまま行動をすることにした。

器用に浴衣の帯を結び、車いすに座っても苦しくないか確認された後、二人で夏祭りの行われている神社にやっと向かうことになった。

久美たちが着いたときにはすでに多くの人たちで込みあっていて、ターゲットが周囲の人間に声をかけ、車いすが通れるような間隔を空けてもらって進んでいった。

「まずはイカ焼きだな」

そういつて止まったイカの絵の描かれた屋台の前で久美にちよつと待つように伝えた後、すでに並んでいた3人の後ろに並びに行った。

ターゲットがイカ焼きを持ってきてくれる間に、少し鼻に違和感を感じたため、鼻から息を強めに吸い込んでみた。
どうも匂いが検出可能になったらしい。

ナノマシーン細胞も順調に進歩・適合しているのかも…。

そんなことを考えていると、いつの間にかターゲットが戻ってきていたらしく、一本を久美に突き出していた。

お礼を言った後に、それを受け取り、ソースが垂れるのに気を付けて口に含む。

するとソースの味が検知され、味覚も働きだしていることが分かる。

どんどん人間に近づいているらしい。

ふと周りの人たちが町で見られるよりも大声で話していることに気づく。

もしかしたら夏祭りでは人間が興奮する薬剤を散布しているのではないのか？

そう考えたが、そういった情報は電脳中枢には記載されていなかった。

人間らしく振舞うために声の周波数と強度を上げた方がいいのかな？
そんなことを考えていると、ターゲットが今度は綿あめを買ってきていたようで、それを一つ差し出してきた。

まだ左手にイカ焼きが残っているのだけれど…。

右手の綿あめを口に含み、これが甘いという感覚なのかと電腦中枢に記載する。

そうこうしているうちに、石段の前まで到着した。

ターゲットはどうも石段の上に行きたいらしく、暫く石段と久美を交互に見比べていた。

決断したのか、ターゲットは、焼きそばを売っている人間に車いすを見てもら言うように頼みこみ、久美を両手で抱え上げた。

首にしっかりつかまっているように指示される。

そのまま、彼に抱えられて階段を少しずつ上って行った。途中何回かの休息を挟みつつ。

ターゲットの息が次第に荒くなっていくのを耳元で聞きながら、自分の機体が人間と同じくらいの重量で作られていることに安堵する。

途中、彼に手の温度が冷たいねと言われたときに心拍数が跳ね上がったが、頂上に着くころには正常値に戻って行った。

「ついた―」

石段を登り切り、そう叫んで座りこんだ彼の足の上に乗ったまま、彼の上からのいた方がいいのかと考えていると、オシと呟いた後にもう一度久美を抱えて立ち上がり、ベンチが幾つか設置してある広

場に着いた。

ここがターゲットの目的の場所だったらしく祭の様子が一望できる。ベンチはふさがっていたが、ターゲットが頼み込み少しずれてもらって座る場所を確保してくれた。

ターゲットは汗を拭き、綺麗だろと同意を求めてきた。

疑われないように頷くことにしたけれど、なぜ綺麗と感じるのか理解はできていなかった。

祭りの光の波長を検出しているだけなのに…。

「俺たちの家は、あのへんだ」

そういつて笑顔で指をさすターゲット。

まだまだ人間からは程遠いのもかもしれない。

彼を観察しながら、アンドロイドであることを思い知らされたように感じていた。

先ほど味覚や嗅覚が成長し少し人間に近づいたと感じていたのだけれど…。

しばらく彼の横顔を眺めることにする。すると、久美の機体の温度が少し上気していることが検知され、その瞬間に時がとまったように感じられた。

この現象は、なんなのだろうか？

ハート・プログラムの影響で、電脳中枢の電算処理が遅れたのかもしれない。

もしかすると、彼への好意の感情が生じたのかもしれない…。

このままだと、非常に危険な状態になってしまう…。

彼へ依存しすぎてしまう。

何とかしなければ、いけない気がする。

人間に近づくためにハート・プログラムを成長させるのはいい。

けれども、彼への好感度を上昇させすぎないようにしなければいけない。

どうすればいいのかなと考えていると、突然、シードの言葉が電脳中枢で再生され、電脳中枢の電算処理が完全に停止した。

「万が一ばれたとしても、ターゲットを抹消すれば大丈夫だ」

シードの言葉が電脳中枢で何度も再生され、ターゲットに声をかけられるまで、再生を停止させることができなかった。

久美：綿あめの甘さとイカ焼きの匂い（後書き）

2011年	07月	29日	投稿
2011年	08月	04日	改定―迷惑かけます
2011年	08月	07日	改定―迷惑かけます×2

【お知らせ】

あらすじが同じな”起動したてのアンドロイドver. 2”を投稿はじめました。

そのため、この作品の名前を”起動したてのアンドロイドver. 1”に変更しました。混乱したらすいません。

連治：ヒーローのごとくナンパ師を撃退する？（前書き）

連投です。

おととい一日一話と宣言しておきながら、いきなり破ります。
すいません。

連治：ヒーローのごとくナンパ師を撃退する？

ある日曜日、鼻歌を歌っている姉が作っている昼食ができるのを待っていた。

椅子に座って釣り雑誌を読んでいると、隣に座っている久美がいつもより少しだけ大きめの声で姉に提案しているのが耳に入った。

「あのっ。」

これから、私が料理をしましょうか」

「大丈夫？」

「はい、得意です」

「じゃあ、お願いしようかな。」

最近、仕事が忙しいのよね」

ふふふ妹の手料理弁当かーと訳のわからないことを言って、トリップしている姉に苦笑して横目で見てみると、突然再起動してこちらを向いてきた。

「連ちゃんは、久美ちゃんの買い物手伝ってあげてくれない？」

「ああ、分かった」

確かに車で買い物をする姉はともかく、車いすで3人分の食材を買いに行くのは大変だろうからすぐに了承した。

「あっ、久美ちゃん、連ちゃんに料理は手伝わせさせないでね。連ちゃん興味のないことは、すごい適当だから」

いらんこと言わなくても…。

了承しがたいが的を得ているかな…。

「はい！」

えっ???

勢いよく答えた久美に驚いて振り向く。

あっと言ってうつむいた久美に苦笑いしながら、昼飯の後夕食の買い出しに行こうかと声をかけることにした。

「今日の晩飯何にするの？」

「二人ともかぼちゃが好きと聞いたので、かぼちゃの煮つけと焼き魚にしようかと。」

日本酒にも合うって聞いたので」

確かに酒好きの姉は喜びそうだな。

魚のパックを見比べる久美を見てふと昔を思い出す。

そういえば、こんな風に凜音とよく一緒に買い物に来てたな。

タイムセールに間に合うように、いろんなスーパーに引っ張りまわされてたことも合わせて同時に思い出し、よく考えれば、いやよく考えなくても凜音は変な小学生だったなと苦笑する。

「どうしました？」

どうもニヤニヤしているところを見られていたらしい。

「なんでもない」

言い訳した方がまだ変に思われないかな…。

「凜音と買い物をしていた時のことを思い出してただけだよ」

「そうですか」

「ああ」

伝えた後で、今日久美と一緒にアイスを特集していたテレビ番組を見ていたときに、思い出し笑いを頻繁にする男はむっつりだと女優

が発言していたのを思い出した。

失敗したと感じたが久美は特に気にしてないようで、まだどの魚にしようか悩んでいた。

とりあえずその女優がカップアイスを買った時にスプーンを入れ忘れられるように願っておく。

「これで全部か？」

「大根おろしを付けたいので、大根が欲しいです」

大根おろしか……。冷やしうどんが食べたくなっただ……。

「取ってくるから先にレジに行つていて」

久美にそう伝えて、野菜売り場に向かうことにした。

大根を手に入れた後レジに向かっていると、久美が見知らぬ男と話しているのに気づく。

誰だろう？

久美の表情が暗い……。俯いてるし……。
変態のナンパ師で決定だな……。

そう判断して、男に話しかけた。

「初めまして。妹に何か御用ですか？」

この変態は、意外なことに全くへこたれずに、いやそれどころか満面の笑みで自己紹介してきた。

「やあ、君が連治君かい？」

僕は、三条四郎。君のお姉さんの後輩だよ。聞いてないかい？」

後輩？

意外なことに姉の知り合いであることが判明した。

ただ、自信たっぷりに聞いてないかいと聞いてきたことから、変態のナンパ師からナルシストに改名する必要に迫られた。

なぜ久美のことを知っているのか解決できていなかったが、警察に突き出す前にとりあえず会話を続けることにした。

「いえ。全く」

さすがのナルシストもショックを受けたのか少し顔をひきつらせ返事をしてきた。

「そっ、そうかい。
じゃあよろしくね。」

前に仕事中に轟先輩と歩いてたとき、偶然久美ちゃんに会ってね。轟先輩が養女にしたいって言うから、一緒に久美ちゃんの孤児院に行ったんだよ。

その後、どうなったのか気になっていたんだけど、今、偶々彼女を見かけてね。

話を聞いてみたんだ」

ああ、それで知っていたのか…。

久美のことを知っている理由が分かり、眼に見えて落ち込んでるのがちょっとかわいそうになる。

慰めようと、姉は仕事の話の家で全くしないと告げると、少し自信を取り戻したようで声量が大きくなった。

最初是不審者かと思ったと正直に話したら、勘違いされないように気を付けるよと苦笑いし、買物物の邪魔をして悪かったねと言って去って行った。

意外とよい人で馬鹿姉に振り回されるタイプかなと最終的に判断し、久美と家に帰ることにした。

エプロンをした久美が車いすを器用に動かし黙々と料理をするのを眺めていると、凜音とは顔は似ているけど全然違うことを改めて実感していた。

凜音は料理をするときは鼻歌を歌っていたし、味見を頻繁に要求してきたな。

姉に似てたな、そういう所は…。

久美は凜音とは全然違うな…。

ただ、見ていると落ち着くところが一緒みたいだけど…。

こちらを向いた久美とふと視線が重なる。

「どうかしました？」

「凜音と顔は似ているけど、やっぱり全然違うんだなと思っていた」と正直に答える。

そして、今日が釣り雑誌の発売日だったことを思い出し、あわててコンビニまで買いに行くために立ち上がった。

連治：ヒーローのごとくナンパ師を撃退する？（後書き）

2011年 07月 29日 | 投稿

2011年 08月 04日 | 改定 | 迷惑かけます

2011年 08月 07日 | 改定 | 迷惑かけます×2

久美：魅了電波少女になる

夕食の後、一人で自分の部屋に帰ってくると、先ほどのターゲットの言葉が電腦中枢で突然再生された。

「凜音と似ているけどやっぱり全然違うんだな」

やっぱり不審に思われているのかも…。

彼の双子の妹に似せて作製されたためどうしても比較されるのは仕方ないことなのだけれど…。

それによって違和感を感じてしまうかもしれない…。

通信機を取り出しシードのアドレスを選択したのち、通信に応答があるまでにもう一度報告の内容を整理していると、今回はすぐにシードが出た。

まずムーンだと名乗る。

その後、ターゲットはこれから違和感を覚える可能性があるかと報告した。

シードが理由を尋ねてきたので、余りにも双子の妹に似ているので

頻繁に比較されることと、それにより違和感を感じる可能性があるのではないかと答えたところ、確かに危険だなと呟いた後シードはしばらく沈黙した。

「では、魅了電波を使用してみるか」

魅了電波と名なんなのだろう？

長い沈黙のちにシードが提案してきたのは、魅了電波という聞いたことのない能力だった。

そのため使用方法と効果をシードに尋ねることにした。

「魅了電波は、近くにいる人間の神経細胞に働きかけ、視界にあるものに好意を持たせる電波だ」

好意？好きになってくれるということなのかな…。

「それで問題が解決するのですか？」

「ああ、人間は、好意を抱いた相手に疑問を抱かない特性を持っているから、問題が大幅に解消されるはずだ」

好意を抱いた相手に疑問を抱かない…。

本当に人間は変わっている…。

人間のことが未だに理解できない…。

シードは魅了電波の話を続ける。

「メンダスイウンと唱えれば、魅了電波が発生する」

メンダスイウン？

どういう意味ですかと質問したところ、魅了電波の開発者が一番好きだった映画のタイトルだと返答があった。

シードはそう解説した後、さらに魅了電波の特徴について話を続けた。

「一度唱えればずっと持続するが、唱えた直後が一番電波の強度が強い。

できるだけターゲットの近くで使えば、ターゲットがムーンに好意を抱くようになるだろう」

唱えた直後…。

ターゲットの近くで唱えたら、不信がられたりしないだろうか？

小声でささやけば、大丈夫かな…。

「魅了電波を使用するときは、できるだけターゲットの視界に入るように正面に立てば、魅了電波の影響を最大にできるぞ」

「具体的にはどのくらいの位置に立てばいいのですか？」

「目を見て会話するようにすれば大丈夫だ」

目を見て…。

目を見て話すとなぜか心臓の拍動が速くなる…。

大丈夫だろうか…。

シードは、最後に効果が出ているかどうかの確認方法を久美に告げた。

「効果があれば、相手の瞳孔が開いて、頬が赤くなる。そうなれば、相手に好意が植えつけられている証拠だから、確認したらいい」

瞳孔…。

確認するためにも、目を見る必要があるみたい…。

魅了電波の説明が大体理解したので、魅了電波発生プログラムをインストールすることにした。

ハート・プログラムと同様の方法で。あの頭痛の伴う方法で。

頭痛が治まった後、シードがほかに質問がないのかと聞いてきたので、最近なぜか気になり始めたことを質問する。

「なぜターゲットが危険だと分かっているにもかかわらず、排除せずに観察するのでしょうか」

久美の質問を聞いた後、そういえば言っていなかったなと呟き、シードは話を続けた。

「彼の子孫に、非常に優秀な人間がいてね。大きくアンドロイドの発展に貢献したのだよ。」

もちろんその子孫がもう一度、同じ発見をするかどうかは分からないが、できるだけ、同じ歴史を繰り返したいのだよ。その方が、人間をコントロールしやすいからね。

それに、同じ発見をしなくても、別のアンドロイドに有意義な研究をしてくれる可能性もあるからね」

優秀な子孫…。

できるだけ同じ歴史を繰り返したい…。

つまり、ターゲットをできるだけ排除したくないのかな。

シードはさらに話を続けた。

「ちなみにその大きな発見というのが、認識障害電波なのだよ。」

研究者自身に認識障害がかかっては、研究がなかなか発展しないからね。

認識障害電波が効きにくい彼の子孫だからこそ発見できたのだろうね」

認識障害電波の開発者…。

そこまで重大な発見をした子孫がいるなら、確かに排除はしない方がアンドロイドの発展には有益かもしれない。

そんなことを考えていると、ターゲットの姉が機嫌のいいときに口ずさむ鼻歌がなぜか電腦中枢で流れているのを感知する。

なぜだかわからないけれど、機体が喜びを感じていることが確認される。

しかし、シードが話題を変えてゴーハの話をしてきた瞬間にその鼻歌が鳴りやんだ。

「そういえば、今日はゴーハと買い物中に接触したようだな」

「はい。ターゲットをうまく騙せているかどうかと・・・」

ゴーハには全く興味はなかったのだが、シードはさらに彼の話を続けてきた。

「そうか。」

奴は、人間の中では、使える方だ。

何より、人間の意見は、ターゲットと良好な関係を構築する上で参考になるだろう。

我々では、理解しがたいことを人間はすることがあるからな。

何か分からないことがあったら、奴にも連絡してみろ。

携帯の番号は、伝えていただろ」

「はい」

「では、引きつづき、監視を続行しろ」

「了解いたしました」

通信を切ると、魅了電波をどう使えばいいかと考えていた。
完全にゴーハのことは忘れて…。

久美：魅了電波少女になる（後書き）

2011年	07月	30日	投稿
2011年	08月	04日	改定―迷惑かけます
2011年	08月	07日	改定―迷惑かけます

【感謝】

今日初めて評価をつけてくれる人がいました。
どこのどなたか存じ上げませんが、この場を借りてお礼申し上げます。

どこぞの校長のスピーチみたいになってしまってますいせん。

それから、初めてお気に入りユーザー登録してくれる人もいました。
ありがとうございます。

いいことばかりで、ちょっと不安になってきますが…。

読んでくれている人もありがとうございます。

これからもがんばって書いていくので、読んでくれると大変喜びます。

連治：熱い夜を過ごす

夕食後突然姉が押し掛けてきて、ひとしきり何のアイスがおいしいかを話した後、突然話題を変えてきた。

「久美ちゃんさっきご飯食べてる時少し変だったよねー。

連ちゃん、今日何かあった？」

変？

姉にそう言われればそうかもしれないと思う、今日あったことを思い出して、姉に今日あったことを話していく。

買い物したことや三条四郎さんに会ったことや料理作るのを見ていたこと…。

三条さんの名前が出た時に、三条君やっぱりロリコンなのかしらと呟いて、目が据わって怪しく光っていたが、三条さんに心の中でごめんなさいと言って話を続けた。

最後にやっぱり凜音とは違うかと再認識したよといった瞬間、姉がじっとこつちを見てきた。

「連ちゃんそれ本人に行ったの？」

ああと答えると、はーと大きなため息をつかれた。

「連ちゃん。」

女の子の前で、他の女の子と比較しちゃいけません」

比較…。

そう言われて初めて確かに失敗したなと気付いたが、そんなつもりじゃないと言い訳すると、そんなつもりじゃなくてもそう思うものだと言われた。

「連ちゃんは、彼女に昔の彼女の話とするの？」

そう言われ、返答に詰まると、さらに追い打ちをかけてきた。

「あつ、ごめんなさい。連ちゃん彼女いなかったよね」

さらに返答に困ると、全くフォローになっていない解決策を示してきた。

「大丈夫、連ちゃんにはお姉ちゃんがいるから」

全然大丈夫じゃない!!

とりあえず何をすればいいだろうか？
まずは謝るべきかな？

そう考えて椅子から立ち上がる。

「今更比較していないって言っても説得力がないわよ」

そう姉に言われ、確かにそうかなと思って再び座り直す。

「どうすればいいと思う？」

そう姉に尋ねると、本当にうまくいくのかと思われる方法を提示してきた。

「ギュッと抱きしめたてあげる？。

あと、久美ちゃん大好きっていいまくればいいよ。

絶対喜んでくれるわ。うん。完璧ね」

完璧？

穴だらけというより穴しかない解決方法だろ？

「他にない？」

そう言って別の方法を探ねると、代わりに私がやってあげるわと意味不明なことを言って部屋を飛び出していった。

馬鹿姉が隣の部屋に入っていく音と同時に、久美ちゃん大好きと叫ぶ姉の声が聞こえ、とりあえず久美を助けてから考えようと部屋をでる。

久美の部屋をノックし許可が出たので入ると、頬ずりをしている姉が目に入った。

何かいい方法はないかと考え、夕食時の姉の言葉を思い出す。

「仕事はまだ残っているって言ってなかったか？」

「そういえばそうだわ」

と姉は嘆いた後、この続きはまたあとでねと久美によからぬことを言い放ち、心惜し気に部屋を出た行った。

何の続きだよ…。

姉が出ていき、急に静かになった部屋で何を話そうかと考えたが、なにも思いつかなかった。

「こっちの暮らしにもう慣れた？」

自分でも何質問してるんだと思ったが、それしか出てこなかったのだからしょうがない。

当然のごとく、久美がはいと答えるだけで話は続かなかった。

ただ、いつも目を合わそうとしない久美がなぜか強引に視線を合わせてくるのに戸惑った。

しかも、ぶつぶつ何かを呟いているし…。
よく聞き取れないけど…。

その後もどうでもいい話に終始する。

何のために来たんだよと自分で自分に突っ込みながら、やはり不自然に視線を合わせてくる久美に違和感を感じていた。

しかし、原因も対処方法も分からずだらだらしゃべっていると、女の子に見つめられるのに慣れていないこともあって、いつの間にか1時間近く時間が過ぎてしまっていた。

確かに姉の言うようにいつもと少し違うようではある。
だけど、悪い方向ではない気がする。

そう判断して、とりあえず今日は話を終えることにした。

「じゃあ、お休み」

そう言って部屋を出て行くときに、久美の顔にかすかに浮かんだ笑顔が初めて見せてくれた心からの笑顔ではないかと感じ、自分でも顔が赤くなっているのが分かるくらい動揺して久美の部屋を出て行った。

その後久美の笑顔が頭から一時も離れず、熱帯夜だったこともあり、一睡も出来ずにいつの間にか朝になっていた。

連治：熱い夜を過ごす（後書き）

2011年	07月	31日	投稿
2011年	08月	04日	改定－迷惑かけます
2011年	08月	07日	改定－迷惑かけます

久美：電波少女でも気に入る男がいることを知る

ターゲットが去った後、先ほどの瞳孔の開いた彼の様子を電脳中枢で何度も再生する。

魅了電波により彼が好意を抱いてくれた可能性があるのではと考え、確認のために再度シードに報告を入れることにした。

「こちら、ムーンです」

どうだった？と聞いてきたシードに、ターゲットの瞳孔が開きいて頬が赤色に変化したことを確認したことを伝えた。

「そうか。人間は、単純だからな。」

ムーンに対して、かなり好意を抱いているのだろう」

シードの発言にターゲットが好意を抱いていることを確信すると、喜びを感じているためか機体内の血流の速度と体温が上昇したのを検知した。

慌てて正常状態へ戻そうと深呼吸を繰り返していると、シードがさらに話を続けた。

「定期的が続けろ。あと、ターゲットの額へ皮膚接触をすれば、魅了電波を直接脳へたたき込めるぞ」

皮膚接触について具体的に何をすればいいかわからなかったため聞き直すと、詳細な方法を久美に告げた。

「手や額で、ターゲットの額に直接触れるだけでいい。まあ、唇でもかまわんがな。
ただし、不自然にならないようにしろよ」

シードの説明を聞き、ターゲットが起きているときに額に自然に触れるのは難しそうだと考え、電脳中枢で方法を検索したが名案は湧かなかった。

ターゲットの姉が頬ずりをしているのを思い出したが、通常の人間の行動ではないと電脳中枢に記載されていたため、行動予定案から外していると、シードが話を続けた。

「ああ、そういえば、お前の家族の製造が完了したらしい。
幸せな記録については、何か希望があれば、伝えておけ。
成功の暁には、今までの記録を上書きしてやろう」

今までの記録という言葉になぜか衝撃を受け、思わずその言葉を呟いて、すべて消去してしまうのですかと尋ねると、不満なのかとシードが聞き返してきた。

「できれば、これまでの記録も残しておきたいと…」

久美の発言の後にしばらく沈黙が続き、ゆっくりとシードは口を開いた。

「だめだ。今回のプロジェクトは、重要機密だからな。

ムーンが人件に捕獲され、記録が調べ上げられると都合が悪い。それに今までの記録を持ったままだと、つけたした記録とつじつまが合わなくなるぞ」

記録を残してもらうための口実を考えたが、シードを説得できるとは思えなかったので、久美は了承することにした。

「そうですね。

わがまま言って申し訳ありませんでした」

「かまわん。

だが、我々を裏切らないことだ。

もし、幸せになりたいと考えるのならばな」

シードは声を低くしてそう告げ、ターゲットの好感度と信頼度を上げるように指示して、通信を遮断した。

無言の通信機を眺め、幸せな記録をもらうためには仕方がないと、久美は何度も繰り返し呟いた。

久美：電波少女でも気に入る男がいることを知る（後書き）

2011年	07月	31日	投稿
2011年	08月	04日	改定―迷惑かけます
2011年	08月	07日	改定―迷惑かけます

連治：自意識過剰な勘違いをしそうになる

久美のことが頭から離れ時結局一睡も出来ずに朝になり、さすがに疲れたのか睡魔が襲ってきた。

二度目から覚めると、結局2時間しか眠れなかったことが分かった。キッチンへ行くと久美が夏休みの宿題をしているらしく、机に向かっていたのだが、こちらに気づき、朝ご飯はどうするかと聞いてきた。

どうもさつき眠っていたときに朝ご飯の時間なので起こしに来たらしい。

起きなかったため姉と先に食べたと伝えられた。

久美によると、うそ寝かどうかを試すわといって姉がほっぺとおでこにキスをしまくっていたらしいのだが、そんな情報はいらないよと久美に苦笑する。

朝ご飯の準備をしようとする久美を手で制して、自分で冷蔵庫に入った久美お手製の朝ご飯を取り出して久美の隣の席に座った。

釣り雑誌を広げ、コーヒー飲もうとすると、隣の久美に尋ねられた。

「昨日眠れなかったんですか」

久美のことを考えていて眠れなかったなんて言えないな…。

そう思いながら、暑かったからなと適当に答えて、サンドイッチを口に運んでいった。

食事が終わり食器を片づけた後、先日買った釣り雑誌を読んでいると、英語のドリルをしている久美がチラチラこちらを伺っていることに気付く。

どうしたのだろうか？

気になったので質問すると、なんでもないですという返事が返ってきた。

何だろう？

もしかして俺のことが気にな…。いや！

これまでの人生経験上過度な期待は持たない方がいいな。

そう自分に言い聞かせ、今月買えなかったリールの広告のページのため息をつきながらめくことにする。

すると、久美が何かを呟きながら、前髪と額に何かが触れたことが分かった。

え？

少し驚いて視線を上げると久美が手を伸ばしているのが目に入る。

「髪に糸くずがついてたから」

驚いていると、久美から質問より前に答えが返ってくる。

糸くず…。
なるほど…。

それでさっきからこっちを見ていたのか。

やっぱり変な勘違いしないでよかった。と前向きに考えることにする。

糸くずそんなに気になったのか。
一度気にしだすと止められないのかな？
すこし意外だな。

今まで知らなかった久美の一面を見れたことに満足して、ありがとうとお礼を言っておいた。

お礼を言うと、久美が恥ずかしそうにうつむく。
いや、恥ずかしそうの部分は、脳内変換された情報かもしれないが…。

とにかく暫くこの久美の様子を見てみたいな。

そう神様に願ったところ、日ごろの行いが悪いせいとお客を知らせるチャイムが玄関から聞こえてきた。

しかも何度も何度も。

出てみると布団の販売の説明だったため断ろうとしたのだが、眠気で頭が回らずうまく丸めこまれて15分も話を聞かされてしまった。

「お姉さんによろしくね」

そう言って、にこやかな笑みを浮かべて去っていくおばさんに、善処しますと伝えて、やっとキッチンに戻ってこれた。

キッチンには、すでに久美がいなくなっていた。

御祖湧く部屋に戻ったのだろう。

少し残念に感じ釣り雑誌を手取る。

リビングのソファーに寝転がって読んでいると、眠気が襲ってきていつの間にか雑誌を顔に乗せて仰向けで寝てしまっていた。

さわっさわっ。

おでこを誰かが撫でているのに気付き、また馬鹿姉かと思ってゆつくり眼を開けていく。

「風邪ひきますよ」

そういう久美の声が聞こえ、久美の顔が間近にあるのが目に入ってきた。

なぜおでこを撫でて起こすのか全く分からず混乱していると、久美の方も自分の行動の不自然さに気付いたのか、慌てて何か言おうと口が少し動いていたが何の言葉も出てこなかった。

眼と眼が合い、暫くお互い動くことができず、時計の音と心臓の音だけが聞こえてきた。

急に我に返ったのか、ごめんなさいと言って前かがみになった姿勢を勢いよく戻そうとしバランスを崩してしまい、車いすから彼女が倒れてきた。

倒れてきた彼女を受け止めて数秒たったのちにやっと少し冷静になり、体を起してそっと彼女を抱え上げ、車いすに座らせた。

「ここで寝ていたら風邪をひくのではと…」

そう言った後、うつむいて自分の部屋に帰って行く彼女に、ありがとうと答えたが、なぜおでこを撫でて起こすのかの答えが結局分か

らず、続けて何と声をかければいいのか迷っているうちにそのまま見送ってしまった。

深呼吸して現状を整理したが、理解不能であることが分かったただけだった。

そう言えば、ちょい悪親父を目指しているはずの倫理担当の大倉先生が、終業式の日テレビに映ったと子供のようににはしゃいでたなと、どうでもいいことしか頭に思い浮かばなかったことから動揺していることだけは分かった。

もしかして彼女も自分に好意を持っているのかもしれないと一瞬考えたが、そうだとしてもなぜおでこを撫でて起こすのかの理由になっていないと結論づける。

何かおまじないみたいなものかなと最終的に思い至り、そういえば乙女趣味なところがあつたよなど、とりあえずはそれで納得することにした。

連治：自意識過剰な勘違いをしそうになる（後書き）

2011年	07月	31日	投稿
2011年	08月	04日	改定－迷惑かけます
2011年	08月	07日	改定－迷惑かけます

久美：欲しくないものも得る

あれからターゲットは何も言ってこなかった。

最初ぎくしゃくしていた彼との関係も次第にもとに戻ってくる。

不自然な行動もターゲットに受け入れられたのかもしれない。

魅了電波で好感度が上昇したのかも。

久美はそう考えた。

「おはよう」

朝ご飯の準備をしていると、突然後ろからターゲットに声をかけられる。

心臓の収縮が大きくなっているのが検知された。

おそらく驚きという感情のせいだろう。

「姉さんは？ 今日、休みって言ってなかった？」

彼が話を振ってきた。

心拍数の上昇を何とか抑えて会話を続ける。

「朝一で緊急の会議できたとのことです。

現在取り組んでいる企画で少し軌道修正しないといけないことがあったようです」

「へー。姉さんが仕事の話するの珍しいね。
久美が女の子だからかな。

俺に女用の下着の話されても困るけどね」

ターゲットに目玉焼きとスクランブルエッグのどちらがいいかと聞いたところ、目玉焼きとの返答が返ってきたので、卵を割って焼くことにする。

じゅーじゅーと音を奏でるフライパンを見ているうちに、次第に心拍数が抑えられていくのを感じれた。

そして、電腦中枢もだんだん冷静に作動するようになった。

焼けた2個の目玉焼きを二つに分け、ターゲットと久美の皿に移し替えた後、彼と朝食をとることにする。

醬油を渡すときにターゲットと手が触れ合って、再び心臓の拍動が加速したのを検知された。

これは、ハート・プログラムの暴走の可能性が高いかもしれない。
ターゲットに好意を持ちすぎているせいかもしれない。

これ以上彼と直接接触するのは危険だろう。
魅了電波は彼に触れずに使用した方がいいだろう。

そう考えて、ターゲットとの食事を再開した。

「今日バイト夜まであるけど、いったん、昼飯食いに帰ってくるから」

そう告げたターゲットを見送る。

部屋の掃除をしようかと考えていると通信機が振動しているのを感じた。

シードの方から、かかってくるのは久しぶりかな…。
何か問題が発生したのだろうか？

そうと考えると、通信を開始した。

「はい。こちら、ムーンです」

「シードだ。ちょっと困ったことになった。

研究員からの報告で、どうも魅了電波と認識障害電波改は、互いに電波干渉しあって、人間の精神を狂わせてしまう可能性が示された。直ちに、魅了電波の使用を停止してもらわなければならない。
ちなみにベリタスと唱えれば完全に停止する」

精神が狂う？魅了電波を使用すると、精神が狂う？？認識電波改と干渉して精神が狂う？？？

精神が狂うと聞いた時、一瞬電腦中枢で電圧超過のためか視界が真っ白になったのを感じた。

ただ、ターゲットたちにはまだ影響が出ていないことに気がついてからは、次第に正常に戻っていくのを感じていた。

冷静に稼働するようになったが、そのせいで新たな問題が沸き起る。

ターゲットたちの信頼を失ってしまうのではないか？もし、魅了電波を使用しなくなると…。

その問題が電腦中枢で駆け巡る。

中枢がオーバーヒートを起こしかけ、慌ててシードに対応策を聞くことにした。

「魅了電波なしでは、彼らの信頼が崩れてしまいませんか？」

「今のままで、大丈夫だろう。」

人間同士は、もともと魅了電波など使わずに、お互いの信頼関係を築いているのだからな」

確かに人間同士はそうかもしれない…。

しかし、私はアンドロイド…。

本当に問題ないのかな…。

魅了電波なしでターゲットの好感度をあげろということなのか。

本当に大丈夫なのかと沈黙しているとさらにシードは言葉が続けた。

「それにアンドロイド同士は、魅了の電波は来ないのだからいずれ本当の家族を持ったときの練習にもなるだろう」

練習…。本当の家族を持った時の…。

「最悪、信頼を失っても、本来の目的は認識阻害電波改の検証だから、近くにさえいれば問題ない。いずれ別れることになるのだし、あまり親密にならない方がいいだろうしな」

信頼を失ってもかまわない…。
確かにその通りかな…。

シードの言うことは最もなことのような気がするが、なぜか電脳中枢が混乱し沈黙が続いていると、シードは了承していると判断したのかそのまま話を続けてきた。

その後、いい報告を期待していると言われ、一方的に通信を切られてしまった。

どうすればいいだろう…。

インストールによる影響で頭痛がする頭を押さえながら、これからの行動について考える。

本当に魅了電波なしで大丈夫だろうか？

魅了電波なしで好意を感じてくれるのか？

ただ、ターゲットの精神の混乱を起こさないためにも、オフにはしなければならない。

それは絶対にしなければ…。

そう最終的に結論を出し、ベリタスと唱えて魅了電波をオフにした。

魅了電波をオフにした瞬間、こめかみに針に刺されたような刺激が走る。

痛い…。

心臓の拍動が不規則になり、機体にも振動が発生し始める。

どうしたんだろう？

新しい感情だろうか？

何という感情なのだろうか？？

これが不安感というものなのか？？？

電脳中枢が制御できなくなり、さらに混乱に拍車がかかる。

休息が必要と判断し、久美はそのままベットに倒れ込んだ。

「久美、久美」

誰かが読んでいる…。

目を覚ますと、視界にターゲットの姿をとらえた。

久美の額から発生していた液体。

おそらく汗と呼ばれる液体。

それをタオルを使ってターゲットが拭いてくれる。

その後に大丈夫かと声をかけ、彼が額に手を添えてきた。

先ほどまでは不規則だった心臓の拍動が、規則的でそれでいて速く力強い拍動に変化したのを感じた。

バイトは大丈夫ですかと尋ねると、休むに決まっているだろうと返答された。

「熱があるから、今日は、もう休んだ方がいい。

これで体を拭いて、寝間着に着換えた方がいいよ。

その間にお粥作ってくるから、それ食ってから寝ること」

そう言ってターゲットが部屋から出るため立ち上がる。

慌ててお礼を投げかけると、どういたしましてといった笑いかけてきた。

彼が出て行ったあと彼の映像を電腦中枢で再生させてみた。
なぜか彼はいつもと変わらないように見える。

魅了電波の効果がまだ続いているのだろうか？

それとも自分が人間らしく振るまえているからだろうか？

そう考えていると、こめかみの痛みがかなり引いていることに気付いた。

しばらくすると、ノックがあつて部屋に彼が入ってくる。

「悪いなレトルトで」

そう言って、彼がスプーンの突き刺さったお皿を久美に渡してくる。それを受け取り、もう一度お礼を言った。

彼はそれに答えず、無言でしばらくこちらを見たあと、ゆっくりと言葉を紡いでいった。

「久美。疲れてる時があったら、無理ぜすに言えよ。
俺たちは家族なんだから、いくらでも頼ってくれたらいいんだ」

家族…。

そう言っている彼の目を観測していると、機体の温度上昇と心臓が力強くそれでいて穏やかに拍動するのが検出された。

今感じているのが安心感という感情だろうか。

機体の温度がどんどん上昇していくのを観測しているうちに、お粥の存在をすっかり忘れてしまっていた。

お粥食べなよと言われるまで…。

久美：欲しくないものも得る（後書き）

2011年	08月	01日	投稿
2011年	08月	04日	改定―迷惑かけます
2011年	08月	07日	改定―迷惑かけます

連治：水族館でデートだと自分に思い込めます

「水族館行ったことないの？」

昼食中に久美と一緒に会話をしていると釣りから水族館の話になり、久美が水族館に行ったことがないと知って思わず大声を出してしまった。

じゃあご飯食べたら行こうかと提案すると、晩御飯の準備があると返答があったので、水族館の帰りに一緒に買い物に行く約束をした。

食べ終わった後食器を片づけ、洗いものはしておくから先に準備しておきなと告げて、強引に久美の食器を洗いだす。

ありがとうございますと後ろで呟く久美の声を聞いて、暑いから帽子をかぶった方がいいよとアドバイスをし、とりあえず貯金箱からお金出せば足りるかなとお金の心配をすることにした。

冷房がキンキンに利いた水族館に入ると、セミが引き起こしている雑音がなくなり、かわりに小さな子供の騒ぎ声が館内の壁に反響し

て響いてきた。

中高生用のチケットを二人分支払ったあと、後ろから来る人の邪魔にならないためか壁際に車いすを寄せている久美を手招きして、お土産売り場は後回しにしてまずは入口から二人で入ることにした。

最初の部屋は、いろんな種類のエイが見ることのできる部屋だった。というより、エイしか見ることのできない部屋だった。

水族館初心者の久美でもさすがにエイくらいは知っており、テレビで見たことあるらしい。

「ここは、エイが自慢な日本でも有数の微妙な水族館なんだよ。これはアカエイって言って、日本でも釣れるよ」

釣ネタ以外に話すことはないのか俺は？

まあ、それ以外詳しくないものとしては勘弁してほしいけれど…。

無意味な葛藤をしていると、久美が空気を読んで釣ったことあるの？と聞いてくれたので、心の中で感謝して会話を続けた。

「前に一度、釣友のおじさんに連れて行ってもらったときに釣ったよ」

そう言った後に、どれだけ大きいエイを釣ったかだとか、それがど

れだけすごいことで、どれだか大変だったかを話そうかとしたが、久美には興味ないことだろうと思いなおし、喉元で止めておいた。

「食べれるの？」

釣り人がよくされる質問NO1がきたので、すらすら答えることにする。

「毒を持っていてすごく危険だから、普通は、そのまま放流するよ。外国では、食べるところもあるみたいだけど。」

日本でも煮物にする地域もあるらしいけど、毒持ってるからね。素人は手を出さない方がいいってさ」

「そう」

「それにほら、俺あんまし料理に興味ないから、エイ以外の普通に食べれる魚も大抵の場合キャッチ&リリースだったり釣友にあげたりだったりかな。」

偶に、姉貴が本格的に料理する時間がある時は、釣った魚持って帰ることもあるけどね。」

最近、姉貴忙しそうだったから」

「私料理できるよ。」

毒のある魚は無理だけど、何度かさばいたこともあるから」

「本当？」

じゃあ、頼もうかな。

この季節は、アジやサバが釣れるからね」

今度からは釣った魚は持って帰ろうかな。

そう考えながら、

全く釣れなかったときは、釣友のおやじギャグで頻繁に登場する誤魔化すために魚屋で買って帰るシーンを体験することができたのかな。

と関係ない方へ思考がいき一人でにやけていると、久美の視線を感じて、慌てて真顔に戻す。

その後、クラゲ、イソギンチャク、ウニ、ヒトデ、ナマコとかなり偏ったチョイスの部屋を通り、やっと女の子受けするであろう熱帯魚の部屋に入ってきた。

部屋に入って最初のうちは真剣に見ていた久美が、突然、うつむきだし魚を見ようとしなくなったのに気付いた。

女の子は好きだろうと思っていたのだが…。

苦手なのだろうか？

不思議に思っ、苦手なのかと聞いてみたらどうもそう言う訳ではないらしい。

どうしたのかと再び聞いてみると、暫く悩んだ後、とんでも回答を答えてきた。

「あの。前に、人間は、近くにいるものに似てくると言われたことがあるので、あんまり魚を見てると、そういったものが苦手になっ
てしまうのではと…。

私あまりそうゆうのが得意じゃないから」

はい???

一瞬、意味が分からなかったが、というより未だに意味が分からないが、真剣に語ってくる久美を見て、茶化さない方がいいかなと判断を下す。

「大丈夫だろ。魚に似るなんて聞いたことないし、もし仮にそうだと
しても、一番近くににいるのは俺なんだから、俺に似てくるだろ」

そう返すと、久美はしばらく考えるような表情をした後、そうです
ねと言って顔を上げた。

とりあえず俺の答えに満足してくれたらしい。

その後の水槽は、きちんと見ることにしたようだ。

出会った時は人形みたいだと思っていた久美が最近少しづつ表情を
見せてくれるようになったことに喜びを感じて、このまま本当の家
族になっていければと心から願った。

ゆっくり巡った後、というより釣談義を一方的に語った後、出口に近づいてきた。

最後のサメの歯のモニUMENTが展示されている部屋に入った瞬間、ふと凜音と来た時のことを思い出した。

「小さい頃、凜音がこれを怖がってたんだよね。
凜音も水族館は好きだったんだけど、最後この部屋を通らなければいけなかったから、いつも眼をつぶって通ってたんだ」

「そうなんですか？」

「ああ。俺は特に怖くなかったから、大抵、手を引っ張っていたんだけど、その日のおやつを取り引きで要求してたよ。

まあ、凜音はが食べてる時じっと見てくるから、結局、凜音のおやつは凜音が食べてたけどね。

あれだけ見つめられると食べれないよ。完全に目から何か出てたよ」

「ふふふ」

最近少しずつ笑ってくれるようになってきたな…。

そう思って、サメのモニUMENTを越えようと、出口から夏特有のむっとした空気が感じられるようになった。

「どうだった？」

そう久美に尋ねると、しばらく考えた後、久美は、楽しいと感じましたと答えてきた。

なんか変わった言い方だな。

まあ、姉ほどではないか。

よく考えたら、デート終わった直後にどうだったなんて普通は聞かないよな…。

まあ、久美はデートとっていいないだろうけど…。

そんなことを考えながら、車いすを押すことにした。

連治：水族館でデートだと自分に思い込めます（後書き）

2011年 08月 02日 | 投稿

2011年 08月 04日 | 改定 | 迷惑かけます

2011年 08月 07日 | 改定 | 迷惑かけます×2

【コメント】

デート難しい。

何かハプニング起こした方が良かったかな？

思い付かなかった。

久美：初めての…（前書き）

連続投稿

久美：初めての：

久美は、駅前の喫茶店に呼び出されていた。

「いやいや、よく来てくれたね、ムーン。
実は君にプレゼントがあつてね」

こちらに気付いたゴーハがひきつった笑いを見せる。
久美にそう声をかけ、読んでいた新聞を折りたたんで鞆にしまった。

「紅茶でいいかい？
その君、彼女に紅茶を。
それから、この椅子どけといってくれ。気が利かないな」

ゴーハが近くにいた店員に紅茶を注文してから、車いすが入れるように椅子をどけるように指示を出す。
彼の口調が慇懃だったためか、店員が少し怒ったように乱暴に椅子を片付けた。

「ありがとうございます」

椅子をかたずけてくれた店員にお礼を言った後、紅茶が運ばれるまで待つ。

その間、ゴーハは足を組み直し、紅茶の味にぶつぶつ文句を言って、彼の輝かしい経歴についての話がはじまる。

紅茶が運ばれてきたために彼の話がいったん中断したので、久美は今日呼ばれた理由について尋ねた。

「どういったご用件でしょうか」

「そんなに他人行儀にしないでいいよ。

僕と君の仲なんだからさ」

僕と君の仲？

まだ、3度しか会っていないのだけれど…？

ゴーハのまるで旧知の仲のような発言に違和感を覚える。

「いや、君を見たときに絶対君だと思ったんだよ。

君も僕に対して、何か特別な感情を感じなかった？」

どうもゴーハは人の話を聞かないタイプの人間らしく、久美が言葉を返す前に話を続ける。

「そういえば、シードに聞いたよ。ずいぶん感情が、表情に出るようになったみたいじゃないか？

僕としては、無表情な君もぞくぞくするんだけどね」

ゾクッと一瞬背筋の温度の低下を感知したが、ゴーハの話にそのま
ま耳をかたむける。

「そうそう。プレゼントというのは、治療電波を開発したんでインストールしてもらおうかなと思ってね」

治療電波？

何のことだろう？

「ほら、この間シードが魅了電波で精神の混乱が起こるって話をしていたはずだけど？」

精神の混乱？

でもあれは…。

「しかしあれは、もう魅了電波を切っているから関係ないのでは？」

「後遺症だよ。」

完全に発症しないとは言い切れないからね。

もしターゲットが不自然な行動をとった場合に使用するとおそらく直ると思うよ。

アモールと唱えれば、発信する仕様にしておいたから」

精神の混乱を治す電波…。

ターゲットは今のところ大丈夫そうだけれど…。

念の為に使っておいた方がいいかもしれない。

「だけど、治療電波は、魅了電波とは逆の効果があるからね。電波を受け取った人間は、近くに 있는ものに嫌悪の情を感じるから、使うときは慎重にしたほうがいいよ。」

嫌悪??? 近くに 있는ものを嫌う??

信頼関係に悪影響があると告げられ、電脳中枢の混乱が再び起こる。

今ターゲットは正常に見える…。

使う必要は今のところないはず…。

不審な行動を取ってからでも治療は間に合うはず…。

ターゲットに変化があるまでは使わないでいた方がいいはず…。

そう自分に何度も言い聞かせるように呟いて、なんとか電脳中枢の混乱を治めることに成功した。

その後、治療電波をインストールし頭痛が治まるまで待っていると、気にせずゴーハは話しかけてきた。

「それとね。今日は治療電波とは別に、君を心配して呼び出したんだよ。」

あまりターゲットたちに感情依存しないように忠告したくてね。

その機体は、確かに老化現象も再現するらしいけど、君は死にはしないからね。

初期化をすれば、また、別も場所で新たな生活が始まるわけだ。その点我々人間の命は短いからね。

どれだけ人間に好意を抱いても、いずれ別れなければならないんだよ」

いずれ別れなければならない…。

にやりとさらに顔をひきつらせ、ゴーハは一瞬話を止める。

久美がびくりと反応したのを満足げに見ると、話を続けた。

「それにもし君がアンドロイドだとばれれば、彼らを処分することになるだろうし、君と彼らが本当の家族として分かりあえることは一生ないだろうね。

それにばれれば、普通の人間は拒否反応を起こすだろうしね」

一生分かりあえない…。確かにそうかもしれない…。

心臓が締め付けられるような感覚を感じ、背中に一滴の滴が垂れるのを感じた。

ゴーハの視線が久美の体を頭からつま先まで舐めまわすようにを這っているのを感じるためか、体温が急激に下がっていくのを感じた。

「それじゃあ、また連絡するよ、ムーン。
僕の言ったことをよく考えることだね。
ああ、ここの代金は僕が払っておくよ」

ゴーハの発言で一口も紅茶を飲んでいないことに気づくが、飲む気も起らず、ゴーハが店を出るまで動くことができなかった。

+++++

夕飯の買い出しをしなければいけないことを思い出し、久美は喫茶店を出ることにする。

スーパーで買い物した後、河川敷に沿った道を上流に向かって移動していると、後ろで自転車か停止する音がして、突然声をかけられた。

「久美、買い出しの帰りか？」

自転車を降りて久美の横に並び笑顔をみせるターゲットに何をいえばいいかわからず、とりあえず頷いておく。

「言ってくれば、買い出しに行くのに」

「いえ、料理は私の役目ですから」

「家族は役割分担するもんだ」

ターゲットはそう言って、買い物袋を久美の膝の上から奪い、自転車の籠に乗せる。

「ありがとうございます。今度からお願いします」

しばらく会話がなく二人が並行して歩いていると、川沿いということもあり、砂埃を含んだ突風が二人に叩きつけられた。

ざらついた砂が久美の眼に入り、手をとめ、眼をぬぐおうとすると、突然、眼から大量の滴があふれてきた。

それと同時に、彼らとは家族になれないというゴーハの発言が久美の電脳中枢の中で突然再生され、中枢での電算処理が混乱して停止してしまった。

止まって!! 止まって!!

眼から流れ出る液体の流出を停止する方法を電脳中の中で検索した回答は返ってこず、夏にも関わらず急激な体温の低下と機体の震えを彼女が感知した瞬間に、液体の流速がさらに高まった。

電算処理の停止のためか世界の時間の流れがスローモーションの再生のように感じられ、眼からの液体の流出のため視界が閉ざされた瞬間に、機体の手が何かに包まれたのを感じた。

温かい…。

近くで聞こえる息遣いからターゲットが手を握ってくれたことがわかり、機体の震えと体温の低下の速度が少し収まったのを検知した。

「何かあったのか？」

しばらく二人が動かずにいた後、彼が質問をしてきた。

彼の声を聞いた瞬間に再び震えが大きくなり、返事をしようと試みたが、電脳処理が混乱して嗚咽が漏れるだけで、結局ごめんなさいの言葉しか出てこなかった。

「言えないことなのかい？」

ごめんなさい…。

彼の二度目の質問にも答えることができずに震えながら頷くと、彼の手を握り締める力が強くなった後、片方の手を離して背中を撫でてくれ、もう大丈夫だよと耳元で何度も声をかけてきた。

「いつか言える時が来たら、いつでも聞くよ。」

家族にも、いや、家族だからこそ言えないこともあるからね。

これだけは覚えておいて、例えばどんなことがあっても俺たちは久美の味方だから」

家族…。私の味方…。

背中を撫でてくれていたうちに機体の振動が少しずつ収まり、手から伝わる彼の体温のおかげか機体の温度が上昇していくと、電腦中枢の混乱も収まってきた。

「ごめんなさい…。」

一人ぼっちになることが、不安になってしまっ

全てを言うことはできないが少しでも彼に対して自分の感じたことを言わないといけないような気がして、言えることのみを告げる。

そうかという彼の呟きを感知した後、久美は機体の背中を再び撫でながら彼の言葉の続きを聞くことのみに電算処理を集中した。

「大丈夫。俺たちは、家族なんだからずっとそばにいるよ」

ずっと傍に…。家族だから…。

彼のはっきりとした声を聞いた久美は、電腦中枢で彼の言葉を何度も再生させると、いつの間にか機体の全ての状態が正常に戻っていることに気付いた。

「ありがとう」

そう彼に告げると、どういたしましてと言って体を離していった。

「じゃあ、帰ろうか」

「はい」

倒れた自転車を立て直し籠から放り出された買い物袋を拾い上げる彼を見て、彼が慌てて手を握りしめてくれたことに気づく。

ごめんなさいと言おうとすると、別にいいよと先に彼から返事が返ってきた。

「困った時は、お互い様だろ。家族なんだから」

そう言って少し赤くなった兄の顔を見て、もう一度、ハイと久美は答えた。

久美：初めての：（後書き）

2011年	08月	02日	投稿
2011年	08月	04日	改定―迷惑かけます
2011年	08月	07日	改定―迷惑かけます×2

【希望】

感想待ってます！！

一件も感想が…。

アドバイス・コメント・批判・批評・苦情・疑問・誤字脱字なんでもかまいません。

書き込んでくれると、大変喜びます。

誹謗中傷は、Mではないので喜ばないと思いますが。

連治：兄さんになる

「ふっふっふっ」

朝から奇妙な笑い声をあげている姉を無視して、レタスにドレッシングをかけていると、久美にプレゼントがあると姉が宣言した。

まあ、あからさまに怪しげなプレゼント包装された大きな箱がテレビの横に在ったので、不気味な微笑みの理由もわかっていたのだが、姉が久美に気付いて欲しいのかチラチラ久美の方を伺っていたので、なんか触れてはいけないような気がして放置していたところ、とうとう耐えきれなくなって、自分から言い出したようだ。

まあ、プレゼント置く位置が悪かったな。

久美の位置からはテレビに隠れて見えないだろうし。

久美も姉の視線を感じて、不思議そうにしてたのだが、久美が聞くうとするたびに不自然に話題を変えていたしな。

「で、今度はどんな車いすなの？」

と、大きさから3台目の車いすだろうと推測して姉に質問する。

この短期間で車いすを二台も買うとは、よほど久美が気に入ったのだろう。

そう思いながら姉の方に向き直すと、なぜあける前からわかるのと涙目になってこちらをじっと見てくる姉の姿を捕らえた。

これは失敗したなと思い、久美に開けてみたらと話を振る。

涙目の姉をオロオロして見ている久美を可愛いなと思いつつ、大きな箱を引きずって食事の机の隣まで待っていると、再び元気になった姉が、早く早くと久美をせかしていた。

久美がリボンをほどいた後に包装紙を丁寧に開くと、予想通り車いすがプリントされた箱が目に入ってきた。

「で、どんな車いすなの？」

さっきと同じ質問をすると機嫌は完全に直ったらしく、少しの力で動く足こぎ用の車いすで疲れにくく遠出も可能だと、まるで自分が設計でもしたかのように自慢げに話してきた。

「足こぎ？」

義足で大丈夫かと思ったが、片手と片足で大丈夫らしい。しかも、ステンレス製で錆びにくく海にも行けるそうだ。さすがに海に入ることはできないらしいが。

「明日、釣りに行こうと思ってたんだけど、一緒に行く？」

と久美に尋ねたはずが、

「最初の遠出は三人の思い出作りのために絶対三人でって決めたじ

やない」

と姉になぜかした覚えもない約束を持ちだされ反論された。

遠出ではなく近場に海釣りに行くつもりだ、しかも三人の思い出作りの遠出のためにも練習として車いすのならし運転しないといけな
いし、と何とか説得に成功する。

久美も釣りに興味があつたのか了承してくれたので、麦わら帽子を
久美に貸してあげるように姉に頼んだ。

その後、車いすで釣りをしていた人を思い出し、車いすでの釣りの
注意点を電話で聞いてみたり、二人分の釣り道具を準備したりする
のに時間を費やした。

釣りの最中に車いすが動かないようなストッパーは必要だったり、
普段持っていないものもあつたため準備にいつも以上に時間がか
かったが、二人でする準備はいつも以上にワクワクしていた。

まあ準備に時間がかかったのは、二人で話していると拗ねて絡んで
くる人物がいたのが最大の原因ではあるのだが。

+++++

本当は早朝や夕方の方が釣れるのだが、足元が見えないと危険なのと、初めての釣りということで何が起こるか分からないので昼から行くことにした。

「ありがとう。に・にいさん」

どうも今日から久美は、兄さんと呼べるように練習するらしい。

最初に出会った日にそう呼ぶように二人で決めたはずなのだが、それ以降呼んでくれたのは今日が初めてだ。

姉には姉さんと呼んでいたが、あれはそう呼ばないと拗ねて言うこと聞いてくれなくなるから仕方がないって面もある。

少し気恥ずかしい気もするがいずれ慣れてくるだろうと思い、特に気にしていないふりをして、低い段差を越えるために車いすを後ろから押しあげる。

普段通り慣れた道も車いすで通れない場所もあり、目的の堤防まで来るのに思った以上に時間がかかってしまった。

土曜日だったためか予想外に人が多く、車いすでも危なくなさそうなどころは全て占拠されていた。

ただ、場所を譲ってくれるおじさんがいたのでいい場所をとることができた。

おそらく久美がいたせいだろう。

餌をつけた釣竿を久美に渡し、最初は一緒に釣竿を手を重ねてもって投げ方を練習していた。

練習中は耳元で感じる久美の息遣いにドキドキしていたが、最初の一匹は二人で釣ることにした。

車いすの脇に中腰でたち、久美の背中から両手を回して一緒に釣竿を握っているのは、姿勢的には疲れるはずなのだが、全然気にならなかった。

最初に二人で釣ったのはサバだった。

浮きがピクリと反応した瞬間の手ごたえから結構大物だと判断し、ゆっくり弱らせてから釣ることにした。

糸を伸ばして、あえて泳がせ、糸をひいたり出したりする。魚が弱って海面に顔を出したところを隣の釣り人に網ですくってもらった。

「ありがとうございます」

久美がそう言った後、おうと照れて座りなおした隣の釣り人に連治もお礼を言う。

それから釣れたサバの口から針をぬいて、サバについてどんな料理ができるかと久美と話した。

そんな感じで、日が暮れる前まで、ゆったりと釣りをしながら、偶に近くの釣り人とも話しつつ、まったりと話をして一日を過ごした。

日が暮れ出して片づけが終わったころには、一日で10人近く携帯アドレスが増えてしまった。やはり女の子がいると声をかけてくる人が増えるらしい。

さすがに久美にアドレスを聞いてきたやつは、俺が丁重にお断りを申し上げておいたが。
油断も隙もないな。

ちなみにそいつからシスコンの愛称を頂いた。

クーラーボックスを持ち上げて帰ることにすると、

「今日はありがとう。兄さん」

と、本日何度目かのお礼を頂いた。最初と違って言い淀むことはなかったが、相変わらず照れくさいのか下を向いていた。

顔が赤いのが、本当に照れているのか、それとも日に焼けただけなのか分からないことだが、照れているということにした方が個人的に嬉しいので勝手に結論を出すことにした。

頭をなでようかと思ったが、よく考えたら魚臭いので、手を伸ばしかけてやめておいた。

さすがに生臭いのは、香水と言うには違和感がありまくるからな。過去に撫でて気まづくなったことを思い出したのも一因ではあるが。

ほんのり赤くなっている久美と片づけをしている間、どんどん笑顔

を見せてくれるようになってきたよなと何度か心の中で呟いた。

+++++

その日の夕食は大変だった。

何がかというとサバ2匹とアジ5匹だったからだ。

サバは二匹しか釣れなかったため、サバの煮つけだけでなくアジの煮つけも久美が作ってくれたのだが、最初に釣った魚は久美が食べるべきとしてサバを久美の皿に盛りつけておいたのだが、俺が今日一人で最初に釣った魚もサバだったため、久美が俺の皿にもう一匹のサバをよそってしまったのだ。

そうになると必然的に姉の皿には、アジがのることになり、

「ずるい」

と、拗ねてしまったわけだ。

久美がお皿を変えましようかと提案したのだが、それじゃあ久美ちゃんとおそろいじゃなくなると断られ、そんならと俺のサバと変えようかと提案したのだが、それじゃあ連ちゃんとおそろいじゃなくなると断られた。

「そうだわ」

と、まるですごい名案を思い付いたかのように声を上げ台所に向かった姉に多少の不安を覚えて待っていると、姉がアジの煮つけの入った鍋を持ってきて、俺と久美の皿にアジの煮つけを加えていった。

「これで3人おそろいだわ」

と、満足げにうなづく姿を見てため息をして、俺は大丈夫だけど久美は体小さいのにサバとアジの二匹をいけるかなと久美に視線を移すと、嬉しそうに微笑んでいたのでまあいいかと諦めた。

その後も姉の独演会は続き、

「連ちゃん。女の子をいきなり海へ連れて行くのなら、日焼け止めクリームを用意してあげないといけないわよ」

「連ちゃん。女の子にとって肌はとっても大事なのよ」

などというろ言われた後、最後に、

「やっぱり、今度からは私がいるときに行かないといけないわね」

と、予想通りの締めくくりで話を終えていた。

とりあえず姉の独演会を聞いて得られた教訓は、久美を連れて遠出するときには黙っていなければならぬこと、そして、魚が人

数分ないときはおやじギャグのように魚屋で数をそろえなければならぬことという二つだった。

連治：兄さんになる（後書き）

2011年	08月	03日	投稿
2011年	08月	04日	改定—迷惑かけます

久美…ゆけむり温泉で疲れをとる

朝食をテーブルの上に並べていると、姉が兄の部屋に駆け込んでいるの光景が目に入った。

「連ちゃん、起きてー、今日から待ちに待った家族水入らずのぶらり温泉家族旅よ」

豆腐とねぎの入ったお味噌汁をつぎ、お箸を並べ終える。

そのとき、ちょうど二人が部屋から出てきて、3人そろっての久しぶりの朝食になった。

温泉にはミネラル分が非常に多く含まれており、美容効果があるらしい。

特に今日泊まる温泉は高いナトリウム塩化物物強塩泉で効果も倍増だと姉が話すのを聞いているうちに、車いすでも大丈夫なのだろうかと不安に思い質問してみると、大丈夫だとの答えが返ってきた。

そういう宿をわざわざ探してきたらしい。

お礼を言うと、家族なんだから当たり前でしょうと言って食事を中断し頼ずりをしてきた。

この状況はどうすればいいのだろう…。

そんなことを考えていると、席を立った姉に兄が空になったお茶碗を差し出す。

「おかわりお願い」

そう兄が姉にと伝えると、姉は、すぐ拗ねるんだから連ちゃんはと言って、ご飯をつぎ始める。

兄にそれを手渡して、頬ずりくらいいつでもやってあげるのにと兄に頬ずりを始めた。

兄はため息をついて、姉に提案をする。

「とりあえず早くご飯食べた方が早く行けるのでは？」

「確かに少しでも家族旅行の時間を増やすべきね」

そう納得して、姉ややっと自分の席に戻って行った。

そうだわ3人とも浴衣で行きましようと大声を出して、いつも以上にうれしそうにしている姉を見ているうちに、次第に久美の心臓の心拍音も軽やかに鳴りだしていることを感知した。

ラジオから流れてくる歌とは全く関係のない鼻歌を歌う姉の運転する車に乗って、途中パーキングエリアでアイスを食べ、目的の温泉宿までたどり着いた。

しかし、速く着きすぎてチェックインできなかったのも、とりあえず下駄に履き替え、土産物売り場を見た後、近くにある広場で沸いている足湯につかることにする。

「私たち3人が歩いていると3人組の修学旅行生に見えるかしら？」

「引率先生と生徒二人なら見えるんじゃないか」

姉の質問に兄が返答すると、

「連ちゃんは女心がまるでわかってないわ」

そう姉は呟いた後に、温泉卵売り場を見つけて急に駆け出して行った。

兄に押ししてもらって姉のところまで辿り着く。

すでに4個入りの卵を購入していたようで、卵を二人に渡してきた。

「久美ちゃん余った一個ははんぶんこしましょう。
いじわる言う連ちゃんは一個だけね」

「卵は高カロリーだからあまり食べると太るんじゃないか？」

兄の返答を聞いた姉は、やっぱり連ちゃん2個にしようかと即座に意見を変えてきた。

しばらく歩いた後足湯を見つけ、足湯のあるベンチまで兄に抱えてもらい、下駄を脱いで3人で卵を食べしばらくつかっていた。

「やっぱり温泉は夏ではなく冬に来るべきだったかしら？」

そうといって浴衣のすそをパタパタする姉に、はしたないよと兄が注意する。

その後、兄は立ちあがり、向かいの売店で冷えて水滴が滴っているラムネとうちわを買ってきてくれた。

ラムネを飲みゆったりと過ごしていると、姉が突然立ち上がる。

「家族旅行といえば使い捨てカメラね。何か足りないと思っていたのよ！」

家族旅行？使い捨てカメラ？

そういうものなのかな？

そんなことを考えていると、下駄をつっかけて向かいの売店に駆け込んで行った姉が、カメラを持って戻って来る。

その後は、チェックインできる時間まで兄と一緒に姉の指示するポーズをとって過ごしていた。

温泉卵にかじりつくポーズが気に入ったらしく、何度も買って食べさせられた。

温泉卵の食べすぎで機体の許容量を超えてしまうのではないか？

途中、そう度々思ったけれど…。

はしゃぐ姉を見ているうちに、もう一つくらいはいけるかも…。

姉が満足するまで、何度もそう思ってしまった。

「3人とも同じ部屋なのか？」

目的の温泉宿に着いた後にロビーを見て回っていると、チェックイ

ンの手続きをしている姉に兄が質問しているのが検出された。

「家族3人居ないと川の字で寝れないじゃない」

家族……。川の字??

姉がそれに返答しているのが観測され、家族という言葉聞いた瞬間に心臓の高鳴りを感じつつ、川の字とはどういう意味だろうと考えていた。

「まずは温泉ね」

畳の匂いが感知される部屋に着いた後にそういう姉に手を引っ張られ、慌てて車いすをこいで姉に車いすが当たらないように進んでく。

車いすを預け更衣室に着いたのち、姉が笑顔で語りかけてくる。

「二人きりでお風呂に入るのは初めてね」

二人きり？

周りに他の人間がいることは指摘してならない気がして、そうですと返答することにした。

視界を閉ざし姉に頭を洗淨してもらっていると、姉の鼻歌を耳で観測しされ、かゆいところはないかと偶に語りかけてくる姉にすべてを

任せていた。

そうこうしているうちにあっという間に時間が過ぎていくのを感じ、風呂を出ることにした。

温泉を出た後に車椅子を回収し売店に寄る。

イチゴ牛乳が最後の一個だったらしく、姉が少し不満そうにコーヒ―牛乳とイチゴ牛乳を一つずつ購入することになった。

そんなにイチゴ牛乳は美味しいのだろうか？

「どちらがいい？」

そう聞いてくる姉にイチゴ牛乳を飲んでみたかったが、コーヒー牛乳だと答えることにした。

そう答えた後じっと見つめてくる姉の目を、なぜか見つづけることができず目をそらす。

すると、頬に冷たいイチゴ牛乳をあてられた。

「家族なんだから言いたいこと言ってもいいのよ」

家族…。

そう言われ、無理やりイチゴ牛乳を握らされた後、突然抱きしめられた。

先ほど使ったシャンプーのにおいが感知され、温泉で上昇した姉の体温が機体を温めているのが観測された。

機体が少し動作不良を起こし心臓の拍動が不規則になる。

手から感じるイチゴ牛乳の温度と姉と接触している部位の温度に差があったからだろうか？

その後、ゆっくりと穏やかな拍動に変化していくのが検出される。

「はい」

そう答えると、その回答に満足したのか久美を開放し、よしと言ってコーヒー牛乳を飲み始めた。

その日は遅くまで二人に話しかける姉を観察していると、いつの間にか眠ってしまった。

翌朝、再度姉と温泉に入り二人でイチゴ牛乳を飲んだ後、チェックアウトの時間まで3人でトランプをして過ごした。

チェックアウトし温泉宿を出た時に姉が突然発言した。

「何かやり残している気がするわ」

「気のせいだろ」

兄が説得を試みたものの失敗に終わり、姉がこちらに話を振った。

「久美ちゃん何かしたいことない？」

「したいこと？」

「家族旅行…。そういえば…。」

「3人で写真を撮りませんか？」

「それだわ」

姉は納得の表情を浮かべる。

「よく考えたら、昨日二人しか撮ってなかったのよね」

そういって、通りすがりの人間に昨日購入した使い捨てカメラを渡して3人の写真を撮ってもらう。

久美を真ん中にして、姉の指示で手をつないで旅館を背景に写真を撮ってもらう。

突然喜びと安心感という感情が検出され、指令を下した覚えもないのに機体が勝手に二人の手を強く握りしめてしまっていた。

帰りの車の中は、ずっと旅行の記録について考えていた。

今日の記録も、任務後の記録の上書き時に消されるのだろうか…。

シードにこの写真のデータだけは残して貰うように頼んでみようか？

この写真だけなら問題ないかも…。

そんなことを考えながら、兄の釣った魚の話を電脳中枢に記録していた。

久美..ゆけむり温泉で疲れをとる(後書き)

2011年	08月	04日
2011年	08月	07日

【お知らせ】

いろいろ改訂しました。

あらすじは変わっていません。

連治：自称恋愛マスターに踊らされる

味噌ラーメンと餃子を10番テーブルの男性に運び、ご注文は以上ですかと尋ねると、常連の男性がラーメンの上に餃子乗はじめた。

先日幼稚園児の娘に餃子臭いから近寄らないでと幼稚園の運動会で言われた店長が、今朝餃子に対するこだわりについて熱く語っていたのを思い出す。

人生の不条理について考えていると、朝から何度となく繰り返された悩みに再び頭を支配された。

久美のことが気になるのは間違いない。

そして、おそらく彼女のことを好きなのも間違いないだろう。

しかし、告白してもいいのだろうか？

彼女が唯の家族としての好意だけだったら気まずくなるのではないか？

その上、嫌われるのが嫌で好きでもないのに付き合うことを了承するかもしれない。

そんなことは望んでいない。

厨房まで戻ってきたが、結局結論はせず、視界に入ってきた店内に飾ってある知らない花に目が止まる。

花占いでもしてみようかとほんの少しだけ本気で考えていると、店長のどなり声が飛んできた。

「轟！ 轟！」

8番テーブルにこれ持っけ！

さっきから、ボーっとしすぎだ！

昼時じゃないからって気を抜きすぎるな！！」

やはり、今日は機嫌が悪いようだ。

運動会事件が相当こたえたのだろう。

素直にすいませんと謝って、急いでレバニラ炒めと唐揚げをトレイに入れ、8番テーブルに運んで行く。

とりあえずバイト中は考えるのをやめにすることにした。

バイトが終わって唐揚げ臭い店のロゴ入り制服を脱いでいると、更衣室で休息中の先輩が声をかけてきた。

「よう、お前が考え事って珍しいな。どうしたんだ？」

「海斗先輩……」

「大したことじゃないですよ」

「女関係か？」

この人はそういう所は鋭いんだよね……。

「そんなところです」

「なんだよ。5股まで成功したことのあるおれに相談してみろよ」

「それがばれて彼女その2にこの店まで乗り込まれてましたけどね
…」

「その後仲直りしたさ」

相変わらず浮きより軽い人だな…。

そう思いながら、自称愛の伝道師な海斗先輩にもとりあえず参考意見として聞くことにした。

「いや、学校の後輩に相談されたんですけど。もし、近しい人を好きになった場合どうしたらいいと思います?」

新恋人の影響から禁煙中という先輩は、にやりと笑って電子たばこを取り出すと、ふざけた言葉を返しをしてきた。

「何だお前やっとな姉貴に告白する勇気ができたのか?」

はい????

即座に自分の話ではないと否定し、ついでにシスコンではないと付け加えた。

「じゃあ、お前の姉貴とのデートをセッティングしてくれよ」

なんでそういう話になるんだと思いつながら、先輩みたいなタイプは姉はあまり好みじゃないと思いますよとやんわり拒否することにした。

「ああ、後輩の話だったな」

さっきからそう言ってるでしょ。という言葉は呑み込んでとりあえず続きを聞くことにした。

「まあ、告白しないで後悔するくらいなら、して後悔した方がいいんじゃないね。

ダメだっても5年後には笑い話になるだけだろうし」

失敗しても笑い話になる…。

それはそうかもなと考えていると、先輩は椅子を傾けギシギシいわせ言葉を続けた。

「あつ、そうそう。できるだけ、ロマンチックなシチュエーションで、告白しろよ。

思いつく場所とか。お前、そういうところ気にしなさそうだけど。女

は、そういうの気にするからな」

余計なお世話ですと反射的に突っ込んでしまう。

横を見ると明らかにニヤニヤしている自称愛の申し子な先輩が電子タバコを啜っていた。

絶対言いふらすつもりだな、この人…。

少し憂鬱になりながら、鞆をロッカーから出す。

用事があるんで失礼しますと更衣室を出て行こうとすると最後に笑いをこらえた先輩が後ろから声をかけてきた。

「じゃあ、後輩とやらによろしくな」

この自称愛の伝道師兼申し子は、明日までにバイトのみんなに伝道しまくるつもりだろうな。

明日のバイトは面倒くさそうだと考えながら、連治は告白してみようかと思いだしていた。

連治：自称恋愛マスターに踊らされる（後書き）

2011年 08月 05日

【感謝】

またお一人お気に入り増えてました。
ありがとうございます。

久美…家族でなくなりかける？

夕食の上げ豆腐を割っていると、兄に突然声をかけられた。

「夕飯の後、一緒に出かけないか。

ちよっと、見せたいものがあるんだ」

見せたいもの？なんだろう？

信頼を得るためには断らない方がよいかなと電算処理で高速に判断し、別段予定もなかったのですがすぐでも大丈夫ですと答えた。

「どこに行くのですか？」

「海だけで見せたいものは行ってからの楽しみだよ」

海？釣りなのかな？

「ズボンに履き替えた方がいいですか？」

「釣りをするわけじゃないから、スカートのままでもかまわないよ」

海で釣りではない？何をしに行くのだろう。

ついていけば分かるから構わないかな。そう久美は結論付けた。

7時にもかかわらずまだ明るい中、二人は駅まで移動した後に、前回釣りに行った駅までの切符を二人分購入して、少し込んでいる電車に乗り込んだ。

少しそわそわしている兄に違和感を感じたが、兄に影響されてか久美の心臓も高ぶっていくのを感じた。

現地に着いた後、前回行った堤防とは逆の方面に歩いていく兄に車を押してもらい進んでくと、次第に潮の匂いが強く感じられるようになっていくのをナノマシン細胞が感知した。

波の音が聞こえる場所までたどり着くと、そこまで街灯はきれていたが、さらに海の近くまで舗装されている道があるらしく、兄は懐中電灯をつけて、細い道を進みだした。

兄に懐中電灯を持つように頼まれる。

車いすの前方を光らせて車いすを押してもらっていると、少しの間目をつぶるように言われる。

言われるままに目をつぶる。

波が岩場に押し寄せる大きな音が聞こえ、岩場に打ち寄せた波しぶ

きを感じるところで車いすが停止したようだった。

兄の手が久美の握っている懐中電灯の光を消しているのを感じ、その直後にもう目を開けていいよと耳元で囁くのが聞こえる。

ゆっくりと目を開ける。

岩場に打ちつけられる波が淡く光っているのが観測され、その岩に打ち寄せるたびに光る波の光景を見ると、なぜか夏祭りの光の群れが思い出された。

「夜光虫だよ。

ここから、よく見えるんだ。

まあ、夜光虫がいると釣れないから、こうなった時は、釣りには来ないんだけどね」

兄はそう言って懐中電灯をつけ岩場を照らしてよじ登り石を海に投げ入れ始めた。

兄が石を投げるたびに石の着水した場所から光の波紋ができる。

不思議な現象だな？

そうと感じながら、波の音にかき消されないように彼の話に聞き耳を立てた。

「でも、見てると落ち着くから、たまに見に来るんだ」

落ち着く？どんな感情だろう？

「どういう意味ですか？」

落ち着くという感覚が分からなかったので、思わず聞き返すと、兄はこちらに戻ってきて答えてくれた。

「落ち着かない？」

なんか静かなところで、きらきら光っているのって」

光るのを見ると落ち着く？

祭りの光のときも感動していたことを思い出す。

人間はもしかすると夜に光るモノに惹かれるものなのだろうか？

そう考えて、体に変化がないか検出してみる。

言われてみれば…。

いつもより心臓の拍動は力強い。そして、心拍数が安定している。そんな気がした。

ただ、前回得られた安心感と表現型が似ているような…。

落ち着くという感情も得られたのかな？

どこか違うのかなと考えていたが、今のところ二つの感情の差を検出することはできなかった。

とりあえず、今後少しずつ改善されていくのかもしれないという結論に達し、考えるのをやめることにした。

しばらく二人で横に並んで海を見た後に、再び兄が口を開いた。

「この眺めと、夏祭りの神社からの眺めは俺の知っている最高の景色だからね。

どうしても久美に見てほしくって」

私に見て欲しい…。最高の景色を。

「ありがとう、兄さん」

兄にお礼を言うと、電脳中枢に違和感を感じた。

彼の私に対する好感度が順調に上がっていることに、電脳中枢では喜びを感じているようだった。

もしかすると彼らと本当の家族になれるのかもしれない。

そういう考えが一瞬電脳中枢に過ったが、アンドロイドでは不可能だという考えに上書きされた。

上書きされた瞬間から体温の低下と不規則な心臓の拍動が起こる。
電脳中枢には対処法が記載されておらず混乱に拍車がかかり、思わ
ず隣に立っている兄の手を握り締めてしまった。

兄の温かい手を握るうちに体温の下降が上昇に転じ、次第に拍動も
正常な状態に戻ってきた。

兄の方からも手を握り返してきてくれて、暫く二人でそのまま海を
眺めたのちに、久美の方を向いてゆっくりとしかしはつきりとした
口調で久美に語りかけてきた。

「久美のことが好きだ。
家族としてではなく、一人の男として好きだ。
付き合って欲しい」

家族としてではない???

家族としてではないという兄の言葉に再び電脳中枢で混乱が生じ、
処理不能状態に陥っていると、再度同じ言葉を投げかけられた。

「もう一度言うよ。
家族としてではなく、一人の男として好きだ。
付き合ってくれ」

家族としてではない??? 家族としてではない????

家族としてではないという言葉が何度も何度も電脳中枢で再生され、兄の手を握り締めても先ほどのように機体が安定化に向かわなかった。

「ごっ、ごめんなさい」

とりあえず状況が理解できずに兄の申し出を断ることにすると、一瞬悲しそうな顔になった兄が頭を撫でてくれた。

「いいって。俺こそごめんな。変なこと言っ
て。これからは、唯の家族としてよろしくな」

家族としてよろしくと聞いた瞬間に再び機体が安定状態へ向かうのを感じし、とりあえず危険な状態を脱したことが分かった。

落ち着くと先ほどの兄の言葉が気になりだす。

唯の家族とはどういう意味なのか？

家族以上に大切なものが人間にはあるのだろうか？

その上、兄の一時見せた悲しげな表情から完全に彼の信頼を失ってしまったことを感じ、このままでは愛想を尽かされるのではないかという考えを電脳中枢から消し去ることができなかった。

連治：大物を取り逃がす

告白に失敗した後二人で帰ってきたのだが、電車の中で明るく振舞おうという話を変えて話しかけてみたものの、ほとんど話がはずまず最後は気まずい沈黙が支配してしまっていた。

振られた場合も二人で電車で帰ってこなければいけないのを完全に忘れていた…。

半日前の自分に文句を言ってやりたい。

何か久美が興味を持つような話題を探したが、さすがに今の状態で長時間話し続けるのは無理だった。

家によく着いた時、今日は変なこと言ってごめんなと久美に謝る。

「二人でどこに行ってたのよ、私は仲間外れなのね」

と嘆く姉に唯の散歩だよと誤魔化し、お休みと最後に声をかけて久美の部屋の前で別れた。

風呂に入った後布団の中で目を閉じてもなかなか眠れなかった。

とりあえず心を落ち着かせるために夜釣りに行くことにする。

もう一度服に着替え、釣道具の準備を開始した。

釣道具を担ぎ、電車はもう終わっているので少し錆びた自転車にまたがり、よしと気合を入れ直してペダルをこぎ出した。

深夜にもかかわらずちらほらと夜釣りをしている人を横目に見て、さすがに人が少ないために堤防の先端に陣取ることができた。

今日は失敗したな。これからどうしようかな。

これからの久美との関係ことを考えていたが、大物が釣れるらしい夜釣りをとりあえず楽しむことにする。

何匹か大物を釣ったもののクーラーボックスを持ってくるのを忘れたことに気づく。

さすがに生臭い魚を素手で持って帰るのは気が引けたため、逃がすことにした。

しばらく釣りと潮風を楽しんでいるといつの間にか心に余裕ができてきた。

久美のことを冷静に考えられるようになってきたのが自分でもわかる。

おそらく気に病んでいるだろうな。久美。

フォローしていかないとな。

とりあえず、あのぎくしゃくした空気を少しでも変える方法が何かないかな。

と考えていく。

考えてもあまりいい考えは思い浮かばなかったが、バイトの休憩中に自称愛の指揮者の海斗先輩がチャーハンの得意な学先輩に彼女に浮気がばれたときの仲直りする秘訣とやらを語っていたのを思い出す。

自称愛のシンフォニストによると、浮気がばれたら言い訳すると相手もその時のことを思い出して余計気まづくなるから、どれだけ愛してるかを伝えて、相手を楽しませることに集中するんだとのことだった。

別に浮気がばれたわけではないが、というかそもそも、付き合うのも断られたわけだが…。

確かにこっちが意識するぎると久美に負担がかかりそうだな。

と考え、とりあえず今まで通りできるだけ楽しいことを考えて過ご

してみて、ゆっくりと関係に戻していこうという当たり障りなない結論に達する。

そこで考えるのをやめ、もう一度、いつも通りの夜釣りを楽しむことにした。

いつの間にか夜が明けかけていたので、朝ご飯の時間に間に合うように帰ることにして釣り道具を片づける。

朝日を見ていると映画の主人公みたいに大声で叫びたくなったが、隣の釣り人に迷惑かなと思いとどまり、最後に一度深呼吸してその場を去ることにした。

連治：大物を取り逃がす（後書き）

2011年 08月 06日

【お知らせ】

プロローグの1話と2話は取り換えた方が読みやすいのではない、
順番を取り替えました。

ミスではありません。

ご迷惑おかけします。

内容に変化はないので、ご安心ください。

久美…ヒーローを救出すべく嫌われ者になる？

沈黙の中二人で海から返ってきたあとにシードに報告しようかと思ったが、夜が遅いので明日にしようと考えて、お風呂に入ることにした。

お風呂から出て、部屋に戻る。

よく考えればシードに睡眠は必要ないのでは？

そう思い直して、通信機を取り出しダイヤルすることにする。

「こちら、ムーンです。今、お時間よろしいですか？」

「ああ、大丈夫だ」

「彼の信頼を失ってしまいました。すいません」

何があったと聞き返してきたシードに経緯を説明することにした。

「そうか。」

「どうやら、以前に使用していた魅了電波が効きすぎて、恋愛感情に発展してしまっていたようだ」

「利きすぎて恋愛感情に？」

恋愛感情はそんなに強いものなのだろうか？
もしかすると、家族感情より上なのかも？

シードの返答を疑問に思い聞き返す。

「人間が夫婦になるための前段階に感じる感情だからどちらかといえど下と言えるかな」

夫婦の前段階……。家族の前段階……。

確かにそう考えると、大切な存在であるのは確かかもしれない。

恋愛感情は、そんなに強いものだったのか……。

しかし、それでも家族感情より下のはず……。

「家族より下の存在なのになぜ彼は唯の家族と発言したのでしょうか？」

未だに彼の言葉が電脳中枢から離れず思わず質問する。

「人間の感情は複雑で恋人と家族の優劣はつけれるものではないようだ」

優劣はつけられない？　ますます人間の感情が分からない。

「その上、恋は盲目という言葉があるように周りのことが何も見えなくなってしまうことがあるらしいからな。

以前話した精神の狂乱現象は、恋愛感情を異常に高めてしまうようだ」

精神の狂乱現象？

あの魅了電波と認識障害電波改の干渉で引き起こされる…。

もしかしたら…。

「もしかしたら、私が過去に使用した魅了電波の後遺症で、大切な家族のことを唯の家族と…」

思わず呟いた久美の言葉が聞こえたのか、シードは久美に返事を返した。

「これだけの情報では、魅了電波の影響があるかどうかはまだ分からない。

人間は感情が高ぶると思ってもみないことを口走ることがある。

家族のことを愛していないわけではなく、唯の家族と表現することで、ムーンへの好意の大きさを示したかっただけなのかもしれない」

好意の大きさを示したかっただけ…。

本当にそうだろうか？

それだけで、大切な家族のことを…。

そう告げた後シードはさらに言葉を続けた。

「とはいえ今が山場なのは確かだ。

ムーンの報告から判断すると、まだ嫌われたようではなく少し気まぐず思っているだけだと思うが、人間は昨日好きだったものが今日嫌いになることが多々あるからな。

特に、恋愛感情はその変動が激しいから、信頼関係を築くには暫く注意が必要だ」

まだ嫌われていない…。

まだ嫌われていないだろうというシードの発言に喜びを感じた。

しかし、恋愛感情は変動が激しいという言葉をとらえた後、久美の機体が振動がおこり、以前に感じた不安感と同じ現象が発生したことを感知した。

通信機越しのシードは当然それに気付かずさらに話を続けた。

「恋人として付き合うか、妹として付き合うかは、ムーンが決めればいい。

恋人だろうが、兄弟だろうが、認識障害電波の検証には問題がないからな」

恋人…。兄妹…。

恋愛関係は家族の前段階…。確かにそう言えないこともないかもしれない。

それなら兄の申し出を受けていてもかまわなかったかな…。

そう感じかけていると、恋愛感情は変動しやすいというシードの言葉が何度も電脳中枢を駆け巡る。

今、決断するのは危険な気がする。

現在生じてきたの兄への感情がどちらか分かるまでは、兄妹の関係を維持した方がいいのでは。との結論が導き出されていた。

そしてそれ以上に、兄が久美の使用した魅了電波のために精神が混乱した可能性が出てきたことに不安を感じ、治療電波を発生させた方がいいのではないかと考え始めていた。

近くにいるものに嫌悪感を抱かせてしまう治療電波を…。
兄に嫌われてしまう治療電波を…。

連治…ヒーローの如く救出に向かう

夜釣りから朝一で家に帰って来るとすでに朝食の準備ができていた。

「連ちゃん釣りに行ってたの？」

「ああ」

「今日は休みをとって久美ちゃんとデートすることにするわ」

休み？突然大丈夫なのか？

「仕事大丈夫なのか？」

「プロジェクトが一段落して暇になったからね。」

それに、昨日連ちゃん私を仲間はずれにして、久美ちゃんと二人つきりで出かけたし」

ああ、それで…。

そんな理由で休むなよ…。

「今日の久美ちゃんは私のものだよ」

姉はそう言っていると久美に頬ずりしながら忠告してきた。

その後、朝食を3人で食べ、まずはバーゲンよと言う姉に久美が手を引っ張られて行ったのだが、姉に当たらないように器用に車いすを動かしているのに関心した。

食事中に新聞に載っていた映画の広告を久美が興味ありげに眺めていたのを思い出し、明日そのロボット映画を誘ってみることにする。

とりあえずオールナイトの釣りは疲れた…。

ということで、バイトの前に仮眠をとることにして、目覚ましをセットした後ベットへ飛び込んだ。

「人生山あり谷ありさ」

7番テーブルに料理を運んで帰って来ると、自称かわいい娘の味方な海斗先輩にポンと肩に手を置かれ、囁かれる。

この人は…。

他のバイト仲間は、みんな目を合わそうとしないし…。

絶対、振られたのも分かってるな…。

少し居心地悪い…。

そんなことを感じながら、概ねいつも通り時が過ぎて行く。

バイトが終わり遅くなって家に帰ってくると、すでに二人は夕食を食べ終わっていたようで、自分の分だけ残っているのに気づいた。

少し遅くなった夕食をさみしく一人で食べていると、姉が部屋から出てきた。

「久美ちゃんまだ帰ってきてないの？」

えっ？ いないの？

「知らないよ」

姉はうーんと唸って、心配そうに言葉を続けた。

「大丈夫かしら。」

すぐに帰ってくるって、言ってたんだけど。

そういえば、今日、変なこと言ってたわね。夜光虫は、好きかとか。連ちゃん、心当たりある？」

夜光虫？？

もしかして一人で見に行ったのか？

何のために??

あそこは一人ではかなり危険だぞ…。

そう考えて、たんすとひっかきまわした後、懐中電灯がなくなっていることを見つけた。

俺を振ったことに後悔をしているのかも…。

かなり周りを気にするタイプのようだし…。

もっと久美の気持ちを考えてフォローすべきだった。

後悔しながら、ちょっと出かけてくると姉に告げ、そのまま海へ向かう電車に乗るべく、駆け出した。

告白すべきではなかったのかもしれない…。

最終の電車に何とか間に合い電車で揺られていると、そんな考えが押し寄せてきて、自分勝手な自分にいら立ちを感じていた。

久美…二度目の…（前書き）

【謝罪とご注意】

すいません。

治療電波の切り方は、1から2に変えました。

1. 電腦中枢で治療電波オフという
2. 口でアモールと呟く

理由としては、電腦中枢で考えるだけで勝手に電波がオンになったりオフになったりするのでは？と思ったからです。
途中の設定変更で、迷惑掛けてすいません。

その関係で、”久美…初めての…”と”久美…欲しくないものも得る”の話を変更しました。

久美…二度目の…

落ち着く場所で考えれば良い案が浮かぶのではないかと考え、久美は夜光虫の見える海に来ていた。

しかし久美の予測とは逆の現象が引き起こされ、久美の電腦中枢では不安感が渦巻いるのが検知されていた。

もし兄の感情が魅了電波による精神の混乱であるなら…。

治療電波を使用しなければならない。

けれど、治療電波は近くににいる者への嫌悪感を増大してしまう。

つまり、私は嫌われてしまう。

しかも兄は私に好き嫌いの変動の激しい恋愛感情を持っているらしい。

なら、治療電波の影響で激しく嫌悪してしまう可能性が高い…。

つまり、かなり酷く嫌われてしまう…。

嫌われたら二度と今の関係に戻れないのでは…。

そうすると、家族でいられなくなってしまっているのではないのか？

アンドロイドは、やはり家族を持つことができないのかもしれない…。

兄のことを思えば、治療電波を使用するのが当然の判断であるのは分かっていた。

ただ、それによって引き起こされる久美への嫌悪のことを考えると、心臓の拍動が不規則になり電脳中枢が麻痺していくのを感じていた。

機体の制御を取り戻すため、何とか落ち着かせようと試みる。

兄と一緒にいると安心感が生まれたことを思い出し、兄の映像を再生することにした。

しかし、なぜか彼の悲しげな表情しか再生されず、電脳中枢の混乱に拍車がかかる。

そして、足元から急激に体温が低下していくのを検知した。

機体の足や手といった先端部位の振動が抑えることができずに、次第に揺れが不規則にそして激しくなる。

その振動が心臓の拍動にも影響し始め、恐慌状態に陥った。

寒い…。

機体の胸に穴が開き潮風が吹き抜けているのを電脳中枢で感知した。

しかし、視線を落とし胸部を確認したが、何も観測されなかった。

ただ、姉の今日買ってくれた水色のワンピースが波しぶきで湿っているだけだった。

手足の振動がより激しくなり懷中電灯を手放す。

視界が急に暗くなり、振動が頭部にまでおよび、上下の歯がガチガチいって震えだした。

解決策が出せずにいると、こめかみに激しい痛みが伴いだし、さらに混乱が加速された。

ただ自分で自分の体を抱きしめ、震えを少しでも抑えることしかできなかった。

どのくらい時間が経ったのか。

その場を動けずにいると遠くから名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「久美ー」

足元に転がった懐中電灯に気付いたのか兄が駆け寄ってくる。

久美の震えている手を両手で握り締め、膝をつき目線を合わせて謝ってきた。

「ごめん。久美の気持全然考えてなくって。

これからは、家族として、兄として久美を幸せにするから」

違うの…。

謝らなければいけないのは、私の方…。

兄の願を断ったのにこんなにやさしい…。

やっぱり魅了電波に侵されているみたい…。

ごめんなさい…。ごめんなさい…。

何度も謝ろうと試みたが口の振動が激しく、言葉にならなかった。

眼から液体が流出されているのを検知する。

涙が流れているのだろう。

これが悲しいという感情かもしれない。

そう朦朧とした状態で考えていると、兄が右手で涙をぬぐってくれた。

兄の指のぬくもりが頬で感知されると、眼からの液体の流出が加速され、さらに制御が困難になっていった。

「アモール」

電脳中枢でごめんなさいと何度も謝った後、そう呟いて治療電波を発信した。

しばらくするとなぜか少し冷静になった。

今どのくらい兄の治療が進んでいるのだろうか？

どのくらい兄が私を嫌悪しているのだろうか？

そんなことを考え、涙が流れるのを感じていた。

波の音と不規則な心臓の拍動。それしか聞こえない時間が経過する。

兄は右手で頭を撫で左手でしっかり久美の右手を握りしめ、深呼吸した後に再度同じ言葉を繰り返した。

「もう一度言うよ。」

絶対に幸せにする。嫌がっても幸せにする。

家族として、兄として」

なぜそんなことを言うのだろうか？

私のことを嫌っているのでは？

なぜ？？

治療電波を発動させているに…。

嫌悪される電波を発生させているのに…。

アンドロイドが人間に好かれるはずがないのに…。

アンドロイドが人間の家族になれるわけがないと電脳中枢で何度も繰り返し唱えるが、口からはそれとは違う言葉が漏れた。

「私の家族になってくれるの？」

「お前は、とっくに俺と姉貴の妹だ。ごめん。」

こんなに悲しませてしまって。ほんとにごめん」

兄の返答を感知すると涙の流速がもう一段上昇し、涙に夜光虫の光

が乱反射して、視界が淡い光で包まれた。

気付いた時には勝手に機体の左手が、兄の方に伸ばされる。

兄の服を握った瞬間、機体が彼の胸に倒れこんでしまった。

兄は頭を撫でていた右手を機体の背中に移動させ、何度も繰り返すまでしてくれた。ゆっくりやさしく。

心臓の拍動が強く、そして規則正しくなっていく。

その振動に合わせて全身に微小な震動が駆け巡る。

そして、先ほどまでは冷たかった涙の温度が上昇したのを感知する。

温かい…。

これはなんという感情なのだろうか？

ゆっくり、ゆっくり心臓の拍動数が通常状態に戻ってくる。

いつの間にか機体の振動もなくなり、眼から流れていた滴も止まっていた。

兄の体温と同程度まで機体の温度が上がっているのを感知する。

「ありがとう」

ぽつりと口から言葉が勝手にこぼれてくる。

それを聞いた彼は、手を背中から頭に移動させ、やさしく久美の頭をなでてくれた。

「さあ、帰ろうか。俺たちの家へ」

「はい」

兄の言葉に素直に返事をしたけれど、彼の服と左手を握り締める手は全く動こうとしなかった。

「そーいや電車さっきのが最終だったな…。どうしようか？」

そう言って兄が笑っていると、兄の携帯が鳴り響く。

「うん。見つけた。うん。海。ちょっと迎えに来て」

姉さんかな…。

電話の相手はやはり姉だったみたいで、今いる場所を伝えた後、さーんざん謝って兄は電話を切っていた。

「なんか。涙声だったぞ。一緒に怒られんの覚悟しよ」

兄にそう言われもう一度素直にはいと返事をする。

そのまま姉が来るまでずっと、久美の手は彼を拘束することになった。

連治：いわゆる普通の誕生日

久美の握ったしゃけ入りおにぎりにかじりつく。

姉がわざとらしく大きな音を立てて新聞をめくる。明らかに読んでいないだろう。

チラチラとこちらを観察しながら、姉が本日すでに3度していた発言を再び繰り返した。

「あら今日は8月22日なのね」

「何かあるのですか？」

久美が不思議そうに尋ねたので姉の代わりにチンチン電車の日だと答えてあげる。

「東京で初めて路面電車運行を開始した日らしいよ」

姉の持つ新聞に載っていた情報だ。

すると、なぜか姉が”連ちゃんなんて大嫌い”と叫んで、鞆をつかんで仕事に出かけて行った。

「どうしたのでしょうか？」

久美が心配そうにこちらを見てくるので、仕方なく理由を教えることにする。

「今日は姉ちゃんの誕生日だからね」

「そうだったんですか…」

「とりあえず昼までバイトがあるから、そのあと馬鹿姉の誕生会の準備をしようか」

そう提案すると、はいと澄んだ声で返答が返ってきた。

+++++

バイトが終わって久美の作ってくれた昼食を食べ、二人でプレゼントと誕生会の食材を買いに行くことにして、駅前のデパートに向かった。

「折角足こぎのペダルがついているので自分で車いすをこぎたいのですが…」

デパート前の横断歩道で久美がそう提案してきたので、押すのをやめることにした。

横に並ぶと、久美が手を握ってくる。少し驚いたがそのまま買い物

することにした。

まずはプレゼントかな？

そう思って、アクセサリ店を見てまわる。

先月は久美の浴衣、今月は姉の誕生日でバイト代の大半が飛ぶな…。

リールを買うのがまた一カ月遅れそうだ…。

そんなことを心の中でひとしきり嘆いた後、久美と二人でプレゼントは何がいいだろうかと選ぶことにした。

無難に誕生石でいいかな？

ほんと四月じゃなくて良かったな…。さすがにダイヤモンドは…。

さすがに8月の誕生石までは知らなかったので、店員に聞くことにする。

サードオニキスとペリドットだと答えられたので、その中から探すことにした。

「サードオニキスは愛情を高める効果がありますよ」

店員が聞いてもいないのにそんなことを言ってきた。

愛情を高める…。

これ以上愛情表現が過剰になったらたまらないな…。

「という訳で、ペリドットにしよう」

それに、サードオニキスは民芸品っぽいのと数珠っぽいのみしか見当たらないし…。

「ペリドットは不安になった時に明るい気持ちにしてくれる効果がありますよ」

姉が不安になることは果たしてあるのだろうか？

店員の説明を聞きながらそんなことを思っていると、久美がサードオニキスのブローチを薦めてきた。

”姉にはいつまでも明るくいて欲しいんだよ”と適当なことを言っ
て、とりあえずペリドットを買うことを久美には納得してもらった。

結局、今年はやりだというデザインのペリドットのネックレスにすることになり、渡された誕生カードに久美とメッセージを書き入れ

ていく。

久美と手が離れたのを少し残念に思いながら…。

最後に包装紙を選んでいると、店員が何度も同じことを言うてくる。

「金とペリドットは相性がいいですよ。

ネックレスのチェーンを純金に変えると効果倍増ですよ」

しつこいなー。

姉の彼氏にその最高の組み合わせとやらは任せることにしたんだけど…。

丁寧に断りを入れながら、姉の好きな黄色の包装紙にすることにした。

プレゼント購入後、食品売場の1階へ移動することにする。

再度久美が右手を握ってきたので、左手で買い物籠をずっと持つことになってしまった。

手がしびれるのをできるだけ表情に出さないように、自分で自分を

励まし食材売り場を回る。

手がだるい……。筋トレしなきゃな……。

こんな理由で筋トレ決意するのは俺くらいかもなと考えて、その日の買い物を終えることにした。

+++++

家に帰ってきてからは、久美が料理を作る様子と釣り雑誌を交互にぼんやり眺めることで時間をつぶした。

「驚かそうか？」

料理が完成したころ、ちょうど姉の帰る時間になったので、そう提案して電気を消して待つことにする。

窓から街灯や近所の家の明かりがさしこむ中、久美と並んで座っていると、久美が再び手をつないできた。

「手を握るの癖なんだね」

「家族だから…」

「家族？」

思わず呟いてしまうと、部屋に飾ってある連治と姉と妹の写真の中の3人が手をつないでいると返答があった。

知識や経験がかなり偏っているな…。

「変ですか？」

かなり変だが…。そんなこと言えないし…。

「変じゃないよ」

そう慌てて答えて、手を強く握り返すことにする。

その時、突然玄関でチャイムが鳴った。

おそらく姉が帰ってきたのだろう。

無視していると、玄関の扉のカギを開ける音がした。

「ただいまー、連ちゃん、久美ちゃん、い・と・し・の姉さんが帰ってきたわよー」

さらに無視していると、二人の名前を玄関で呼ぶ姉の声がどんどん涙声になっていく。

少しかわいそうになって予定を変更して玄関まで迎えに行くことにした。

「私は信じてたわ」

そんな意味不明なことを言い二人に抱きついてくる姉に少し辟易して引き剥がす。

姉を料理の載ったテーブルまで案内することにした。

「久美ちゃんありがとう」

そう言って久美に頬ずりしているとき、こちらに潤んだ目で非難の眼差しを向けてきた。

「それに比べて連ちゃんは最近意地悪ばかりしてくるんだから」

そんなことを言うてくるので、とりあえず、デパートで買ったばかり

りのネックレスは久美にあげることにした。

したのだが…。

「ごめんなさい。連ちゃんのこと信じてたわ」

そう言って頼ずりしてくる姉に離れてもらうため、交換条件としてネックレスを渡さざるを得なかった。

その日は姉が満足するまで話につきあってしまい、夏休みの宿題は明日からすることにして、ベットに入って眠ることにした。

そろそろ始めようと思っていたのだが…。

というより、忙しすぎてすっかり忘れていたのだが…。

春香…ラスボスになる（前書き）

第一章完結

春香…ラスボスになる

春香は、会議の後に約束した後輩の仕事も片付けて後輩を待っていると、外回りから後輩が帰ってきた。

「あ、三条君どうだった？ 話、聞けた？」

「ええ、最初は変質者かと思われましたが…。
どうやら蕎麦屋の主人は孤児院出身だったようです…」

この後輩は何を言っているのだろうか？

私をお願いしたこの意味が理解できていなかったのだろうか？

そういえば暑さで正気を失う人もいるらしい…。

「そんなかわいそうな人を見るような眼で見ないでください。
きちんと聞いてきましたよ。」

彼女、久美ちゃんって名前らしいんですが、やっぱり孤児らしいです」

とりあえず後輩が正気を取り戻したことに安堵し、続きを促す。

「詳しい話は、これ以上できないそうですが、もし引き取りを考えているようなら、あきらめた方がいいとのことでした」

「いや」

即答で答えると、とても優秀でかつこよくて完璧で頼りがいがあり
どんな無理な要求も応えてくれるスペシヤルな後輩は、最高の答え
を返してくれた。

「そう言われると思ひまして、今日の夕方9時に、会う約束をして
きました」

「久美ちゃんに？」

「いいえ。孤児院を運営している黒田さんです」

「そう、ありがとう」

その日の約束した時間に後輩と黒田孤児院を訪れる。

出てきた見知らぬ少女に案内され、応接間にソファ―に腰をかけて
いると、彼女が紅茶を持ってきてくれる。

ティーカップがカチャカチャとテーブルに置かれ、それと同時にバ
ーブの落ち着く香りが匂ってきた。

ありがとうとお礼を告げると、黒田院長が待たせてすいませんとい
って部屋に入ってきた。

「久美のことですね」

「はい、是非引き取りたくて、お話に来ました」

「そうですか」

少しの沈黙の後、彼女は言いづらそうに話を続けた。

「彼女は、かなり複雑な家庭環境でしたので、養子はやめておいた
方がいいでしょう」

「どうしてでしょうか？」

彼女の年齢のときには、家族は絶対必要です。

こちらでも幸せだと思いますが、やはり、子供の数が多いので、一
人当たりに避ける時間は、少なくなってきました。

必ず幸せに見えます。

お願いします」

黒田院長はため息をついて話を始めた。

「彼女は、どうも母親に虐待されていたみたいで…。

父親もおらずその上義足で世話がかかることが、母親のストレスに

なったようです。

今は亡くなった彼女の母親が、彼女に暴言を吐く時に、お前は人間ではなくロボットだと…。

相当、辛く当たっていたようです」

そんなことが…。

「そのせいか彼女自身も自分のことをロボットだと思いこんでるようで…。

声が高いのも、感情の表現が苦手だったりするのも、ロボットだからと…。

その思い込みがどんどん悪化しているようで、3年前にうちに来た時にはすでに味やにおいを感じなくなっていたようです。

お医者様によると、精神的なものが相当大きいみたいです」

「そうですか」

「どうします？ 本当に養子になさるんですか？」

今までかなり劣悪な環境にいた彼女のことを思うと胸が締め付けられ、やはりあの場所で彼女に出会ったのは運命的なものだと確信した。

「もしよければ、今度、久美ちゃんと直接お話をさせていただきませんか。

今日は遅いので、今度の日曜日でどうでしょうか。

その時に、もし久美ちゃんが私と家族になりたいと言えば、ぜひ私の養女として引き取らせて下さい」

院長がその考えに賛同した後、院長のそろそろあの子も幸せになってもいいはずだと呟いたのが聞こえ、春香もその考えに同調した。

「本当に養子取られるんですか？」

さっきから何も発言しなかった空気のような存在感の後輩が孤児院を出た後に突然声をかけてきた。

ちょうどよかったので、私の考えた企画に乗ってもらうことにした。

「ええ。もちろん。アンドロイドなら、心をインストールすればいいのよ」

「えっ？」

「それに、味がしないのなら、味を感知する機体に取り換えればいいだけじゃない」

「はい？」

「三条君は、大学時代演劇部だったわよね」

「ええ。それが何か？」

「確か劇団の名前はイケイケ団……」

「それは忘れてください」

「決めたわ。」

三条君は、中ボスよ。

ラスボスは、私がするわ。

私だとちょっと威厳がないかな。

よし、三条君、明日までにボイスチェンジャー買って来てくれる？」

「はい？」

「ほら、渋い声になるやつ」

じゃあ、秘密結社の第一回久美ちゃん幸せ家族化作戦会議といきま
すか。

春香…ラスボスになる（後書き）

2011年 08月 07日

【お知らせ】

以上で第一章完結です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1556v/>

起動したてのアンドロイドver.1

2011年10月9日13時28分発行